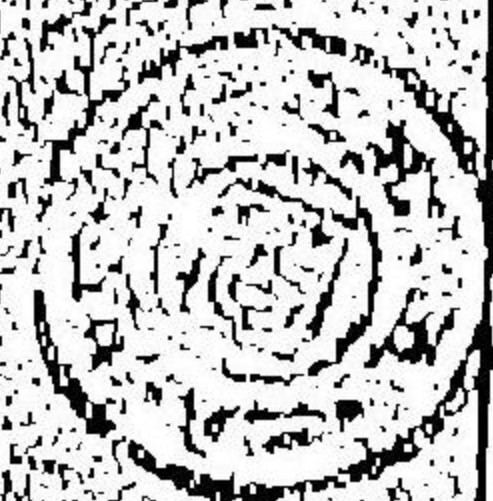


松田敏足演述



惟神道話

福出

豊田舎發行

惟神道話はしかさ

荷田翁の歌に。明日ありと。思ふ心の。おこたりに。

さのみ一日の。暮やをさまぬ。とあるが。余年若さ

より。我志貴嶋の。大御道を尋ねて。大かた此四十

年ばかり。あからめもせず。唯其奥所をのみ。今年

は去年の。枝をりをかへ。よち入ぬるに。入れば入

ぬる程。尊く萬にたらひたる道。此道をおきて。ま

た有るべきかは。斯るごと寶の。うづ寶を。世の粗略  
に見て。得たどらぬが。口惜しき限なるにも。いか  
で余が。知識得たるばかりも。世に弘め後にも。遺  
さばやと思ふは。何しか身は。七十近くなり。我世  
には。明日の有へくもあらず。さて。我世の暮る。  
さしは亦。なべてならすぞ。かこたれ侍る。斯て  
し。晝夜おがず。勤しみつ。長き夜の。寢覺がち

なぬには。株主に。紙と筆をよせ。此年ころ。氣の上  
る病に染ては。強て筆取つ。けての。こちらは  
。毛の。筆の立を。分ぬ様の折に。後圃に走り  
て。鈿取など。惱まじきを。和めぬるが。獨笑ひも  
をせられ侍る。斯く勞さぬるも。一日の暮なむが。  
惜心きからの事なりけり。さて此回のは。女童にも。  
聞取らせたく。俗風たる物語など。物したる。大御

道を。地におとすなど。厭ふ人も。有なむかし。少  
かひねり出したる歌。

天地の。そきへに足らふ。此道と。

人は知らずやも。いさをほろこも

志貴しまの。道にこゝろを。盡しかた。

おいの波よる。事もわすれて。

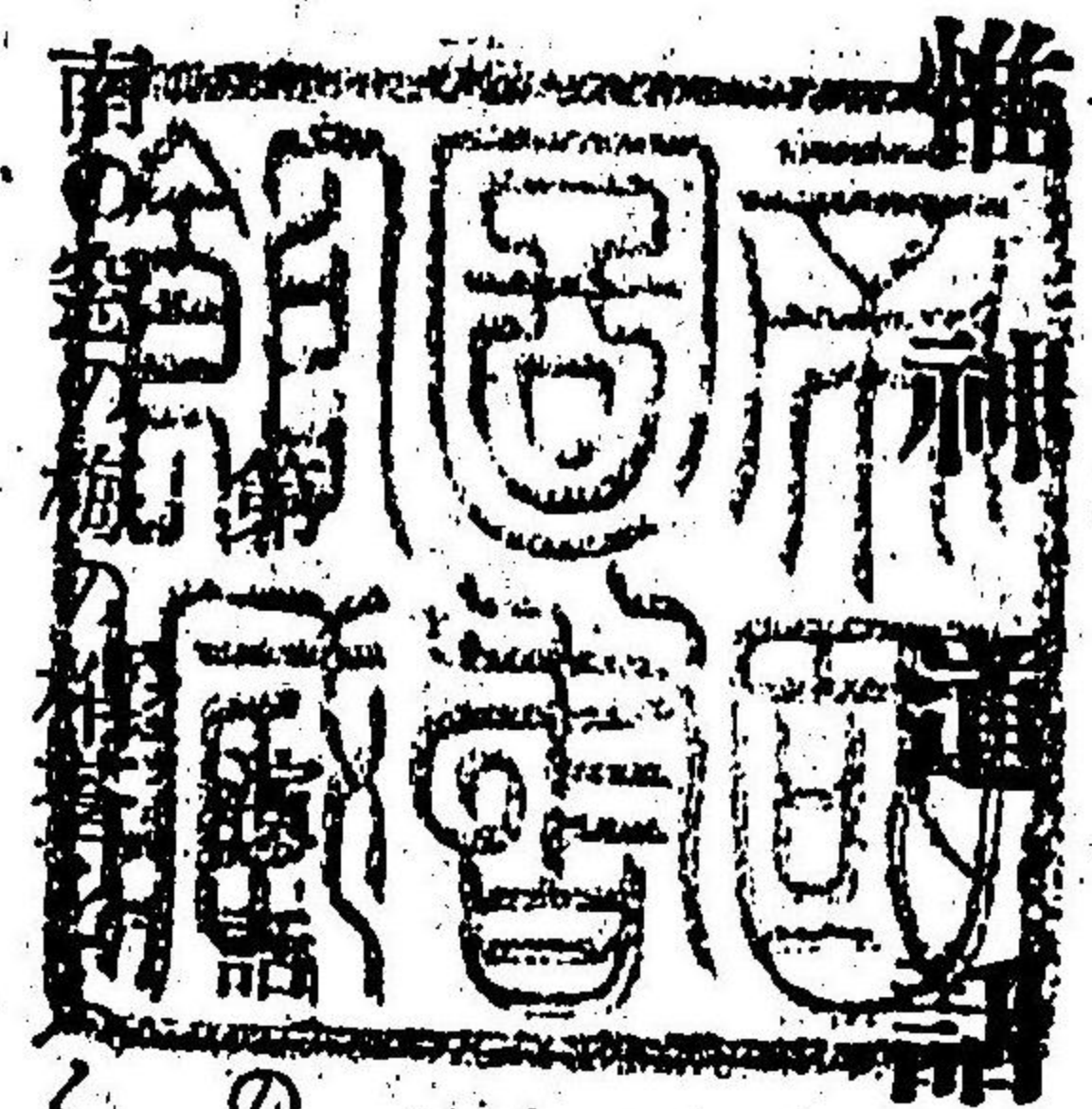
明治卅五年夏の初 豊田舍敏足しるす

### 惟神道話目次

第一 演話の發端	第一頁
第二 人道 五本の指 <small>特別勝れ</small> たる道理	地球の亭主役の話 禽獸と人類と苦と 樂 <small>と分る</small> の原因 第四頁
第三 性理 俠客輩 <small>俳優松本幸四郎</small> を打し話 孟子四端の說の卑俗講釋	人體及び禽獸虫魚の天の賦命保護 <small>を受</small> 談話 第十七頁
第四 天道 道の本原神に出る論 速刺哲の産育神の說 胎内十月の問	の生長 人死生の根本の狀 中 <small>天罰</small> の論 第廿九頁
第五 運命 武運の稽古 <small>の說</small> 豊大閣志津ヶ嶽の一戰 <small>天の助に因</small> 奈勃翁	の天に棄 <small>られし</small> 話 大舜 <small>の金縢にて打</small> の事 第四十二頁
第六 神德 日本は特別神の愛する國なる <small>支那人宋の太宗</small> 西歐人	マルキユス。ヴァの日本を論 <small>たる</small> 程赤城 <small>の懺悔は</small> の事 第五十三頁
第七 幽政之上 幽 政の根軸 崇神宇多鳥羽の三帝冥の助 <small>を得た</small> 話	

- 唐の裴度が人相のの談話 第六十一頁
- 第八 幽政之下 幽政の負債差引算の話 王祐幸福貸借の返済を促がす話 第六十九頁
- 市女と傳吉と天祐を交換する話
- 第九 社會 國家社會の起りの論 會大木荷ぎの比喩 不品行の傳染すみや論 第八十八頁
- 二頭鳥の鬢へ話 家内の不熟の原因
- 第十 教育 我帝國教法淵源派出せしの二條 更紗摺形教育の説 韓文公の書 第九十五頁
- 寐恍先生アベコヘの陳謝無形の小使錢の話
- 第十一 神社 郷村社保存の主義 町村制の勅語隣保團結の舊慣 氏神産土の起原 第一百頁
- 及び其恩徳日本人報本反始の大義務 神職に依頼する旨趣

目次畢リ



豊田舎 松田敏足述

南の梅の枝の梅のの發端

暦の新たなるを啓す爰に明治第三十五回の新歲を迎へ一杯の屠蘇酒を酌み一碗の魚羹を喫して新年の祝宴を氣取り雜煮の餅に腹を鼓し頬杖熟々思想をめぐらすに吾輩今此盛時に遇ひ此開明に浴しながら徒らに犬や馬同前な齡を重ね生きて時に益無く死して後に聞ゆると無く幾んど社會の居候然たるに終るは豈遺憾の事ならずや否々吾輩訣して居候然たるに終らざるなりソハ時勢の開明進運に當ては種々な役割で廢物が利用せられモルヒネもまた補藥となる去れば頑固の天保翁にも又取るべき無くんばあらず吾輩爰に志し幾んど數十年腦髓を浚た結果存念を吐く

左の如し

其は抑も世運が一變して一新開明に遷ると云舞臺では世間の一体は跡先見ずに世の風にまかれさす汐に押され彌次馬の先陣と流行の極端に走り固有の道や忠孝禮義の風を大抵撥排して見向きもせず爰に人心の腐敗風俗の輕薄遂には國家の患害撥ふべからざるに陥いと云者然り而して其間哲人君子を云顔が出て一家の見識を立て改進保守の度を加減し内外古今の良法を調合し國家を富岳の安きに置き同胞の幸福を全うせしむると云役割でアル

一体世が文明に進む時には兎ニ角知慧と云者が大造珍重さるゝ其レは其筈なのでソコデ各々知慧天狗が世に誇り高い鼻の鉢合せで社會を壓倒する勢ひとなる爰に即ち道德は壓制時代の卑屈器械と見就され固有の忠孝の道や禮義などは天保親命の小言と聞就し隨て老人と云者は社會の有用を通り過た不用の廢物兎ニ角棚に上げ置くべしと云寸法で推行くより老人の對偶が自から麓末と云世の成行きに移り往くと云者デス

爰に即ち此世間の成行につき的面因果應報の理が顯れて來るソハ其老人を麓末にした若い者が不老不死の藥でも飲た様に千世に八千世に若い者で居れば能いが固より其譯にゆかず第二の天保親命となるのは早即の事で因果はめぐる車の如く老人を麓末にした報ひは的面我身が麓末にさるゝ番が來る歳老い足腰弱つてから好た物が喰たくても物見遊山に往たくても應ふ人の無いのは随分慘苦物で有るガカラ若い内に己が將來麓末にされぬ準備として老人を大切にせねばならぬと云もの我國固有の道を麓末にするのも此老人を麓末にすると全く同じ割合な物です斯云都合ヤイから此道德と云が差向きて吾輩の必要物となるされば爰に斯くのべ立ると云も訣して他外の爲ならず吾身の上と云必要に驅られ伸立る譯なのでサテ其身の必要と云は即ち又世間大方諸君の爲にも全しく吾身の必要と云者ガカラどうか此説話を他外の事とせず吾身の上の事とし朝晩家内婦人子供にも此道理を記憶させ合點させたい事です

サテ吾輩の主義と云て何も今日の改進に反對するの譯では無い唯滅方に改進々々

と一方に傾く所へナト固有的保守の藥味を適度に調合すると云丈デス彼生意氣に人眞似ばかりして固有の國風や老人をへし込み遂に歐米の殖民地見たいナ國とならぬ様の老婆心と云者デ是謂ゆる上に云た吾輩老人の專要たる責任であるサテ以上旨趣は廣く江湖に合點させたい譯ゆる若し婦人兒童に其理屈が飲こめぬ様では全く駄目デスから何でも捷解する様言文一致に成丈平和に伸べ然も座中の人には差向ひ對話する体に問ひ答へに理屈を明白にし其意味が得道せらるゝ様伸立る心算デカラどうか其心持で聞てもらいたい有る

## 第二 人道並に五本の指地球の亭主役の話及び禽獸人類苦樂の原因

唯今此席で小生が諸君に對つて一場の演話を開くのは先ツ人道と云一題より糸口を開くのデス一體道と云者は我古典に天地の初發先づ生ませる神の名を天御中主神次に高皇產靈神次に神皇產靈神と有マス是が天地間道と云の世に顯れた始で即チ漢籍では大極即チ兩儀を生ずと有るのが全く同一なので陰陽中和と天地位と中庸の道爰に立つ所以デスさて其天道之を人身に受て即て人道となる是等深遠の事

は追々の事とし先ツ差當つた所から話をせねばならぬが一体今日の世上を見渡すに如何にも文明の進歩は駁々乎として日に新たに月に添て進むのダカ其レに伴ふて人心の輕薄風俗の腐敗と云たら實に開關未曾有と云者でソハ新聞の雜報などを見て實際上から云ても世間一体悪いヲを爲るのを名譽の様に心得て四犯ダノ五犯ダノ強盜殺人放火の肩書を並べて鼻を高くすると云風で昔では古今に稀なりと云た袴垂ダノ石川五右衛門ダノも今日には徒跣で降参すると云有さま其レから淫賣密夫強姦揚句の果の血塗れ騒ぎ竊盜詐欺取財位は新聞も大抵見出位で打跳せて往くと云のが日本國中今日の現證ソレが下等社會枝葉丈の事なればまたしもダガ其輕薄が根本にも溯ほつて昔では我天皇は天照太神の御代ダカラ勅命を背けは的面身が滅びると心得正統記にも此國は神國なり神道に違ひては一日も日月を戴くまどき謂れなりと有るノヂヤ然るを今日では何な神罰ソナ幼稚チ妄想はなしは眞平御免ダと一言に撥とばして仕廻ソノヂヤ昔では勅の一字を被れば敵に向つても生命が惜く無い不平が有ても存念が起ても勅の一字で何も箇も打すて忠義一

圖に方向がたちまち一致すると云のが實に日本の國風で名物で大和魂と云者で開關以來國威の赫やく一日の如しで三千年を打通して來たのも全く爰に基づくのダ其レを今や此東洋多事世界は戰國の街と云時勢に對つて日本の命脈とも云べき此固有の道を根から土臺から打壞勢況となすとは實に日本人の心底がわからないと云者歐米では如何にも文明に伴なふて人心が狡黠にも成るし輕薄にもなるのダカそれに併せて一方に教法を確乎と守つて幾分人心の腐敗を補なふて往くのダカ日本のは今日は上も下も殊に上流人が悉皆無神者流で大事を此人間の精神を纏め日本の國体を固むると云惟神の道をばフ、ブンと鼻の先で會釋ふと云者で上に習ふ下と世の中一統が滔々輕薄でナニ世の中は目に見ゆる限是より外に天罰ダノ因果ダノ云者が有て耐る者か悪い事は爲た丈の利益ダマア隨分精出しなと云様を調子の世の中と成たと云者此な風で往たら世は惡魔世界と云者ダカラ此輕薄風を幾分なりと補なふ爲先ツ人道の說話を第一着手にする譯合である

一体此惟神の道と云は實に天地の間に充みちて至らぬくま無く萬事万物を引包ん

で遺さぬと云もの漢籍中庸に孔子の言論として「鬼神の徳たる盛んなるかな之を見て見ず之を聞て聞かず物に體して遺すべからず」とある如何にも此通り眞に神々の神徳と云者は無量無邊盛んな物で有るのダヤ固より神は聲も無く臭も無き者デスから見んとしても見ぬず聞かんとしても聞かれぬ物ダカ其空々寂々の中に活潑の精靈有て万事万物に體として何が一ツ遺るゝ者は無いと云の意でさすがは聖人孔子の言説で唯一言に能く言ひまどめた物で有る

以上云通り惟神の道と云者は世界中幾億萬の事物の上に往渡して居るのダガ先ツ人体の上にては彼形より以上目に見ぬ精神をさより形より以下目に見ゆる此骸の百機千關の一々に往渡つて其一々の活動をなす話と云たら其レこそ中々一朝一夕の能く盡す所が無い其万分の一の荒増シでも幾んど話の緒が立かぬ様の「テスタからとにかく早わかりに皆さんの合點の往く様の事からやりかくる心算でアル」サテ其早わかりの話と云は諸君先づ此吾指に能く氣を付けて御覽一体此指と云は鳥獸にも有るは有るのダガソハ鳥なれば木に栖る便利に作り獸なれば山坂走る便利



に作り鷺や虎には其爪を便利に爪を作り水鳥には其泳ぐ便利に水掻を作り鷺鶴には其泥に入て泥游押ゆる便利に長き嘴と脛を作ると云様に一々其作りに由て各自が神に賦命られてる所以の理由が明白に知らるゝと云物デス其より推し御互人間の指をかう動かして見るに先第一五本の指に三ツの骨節が具つて伸屈み實に自由自在然も其指先には神經布目の如く一面に往渡つて萬般を機敏感覺するのデ是が即チ人間が鋏取り鎌取り筆取り算盤取り或は鋸取り槌取て山を拓き海を埋め議論を書き計算をなし汽船や鐵道を作り開き文明を起し地球上の頭取となり支配人となり所謂萬物の靈長株を占る爲の便利に此指が作つて有ると云者でスソコデ此指の造りにても吾輩人間が鳥獸に特別ましたる神の對遇を受け萬物の上席に付く格別な優待株を賦命つてる理由を能く勘辨し能く認めなければならぬでアル是が即チかの神の授けた自然の惟神の道と云者でス

サテ斯く優待株を受け萬物の上席に就くのは能いが其代り人間は其レ相當な價直貫目の有る品行を守らねばならぬ爰に到ての御談議がさうかするとチト耳が痛く

なる其レでも此一條が程よく往ぬと彼動物會議で畜生連が異議を發して人間の靈長株に賛成が六ヶしいソハ或人が牛馬に對つて得意顔に如何さま人禽獸に異なりダト云た所が牛と馬とがフ、フンと鼻の先で笑ひ如何さま禽獸人に異なりダ今まで終度馬が厩限りに身代を差出して債主に沫吹せた話も無く牛が無錢遊興で遊廓の行燈部屋におち込まれた咄も無いノダと笑つて居たと云話サア此通ダカラ今時の人間社會の有さま新聞の雜報にても書立られた所から見ると随分彼方此方な人異禽獸が大分多いで實に氣の毒な物でアル

抑も此道理と云者は其原天神が此吾輩人間の一生を全うせしむる爲賦命られたる所の者でソハ漢籍詩經に「天蒸民を生す物有れば則有り民の彘を乗る此懿徳を好む」と有る此則と云が則チ此道理を云ので一体天神が此多くの人民吾輩を生作られ其レが生活交際を全うせしむる爲授け下さつたのデ云はゞ恰も親が其子の生涯を安樂にさせようと云て田圃家藏金銀を譲りあたふると同ト趣意であるソシテ一通り見た所では田圃金銀は有さへすれば寢て居ても榮耀な生活がさるゝと云物道理

はそれと違ひ其道理に適する様多少心を痛め體を骨折らねばならず随分面倒なる所も有れば道理は田畑金錢にくらべて大分價直が下る様ダガ訣してソナナ物に非るトデス

其子細は田圃家藏金錢は何程澤山有ても此道理と云者を調合して用ひねは訣して我身の安樂を取る用達にならぬので若し道理を加はずして金銀財寶を積む時には却つて金が讎敵と吾身を滅す有害物となるトデス然して吾人幼少より人間本分の道理を十分に盡して活動く時には田畑金錢一步一錢持ぬ身が生涯を安樂にくらすトで而も道理にまかせて爲るのは更に危嶮ト無く堅固に立派なる一身が持るト云物で有る爰に於て道理の其價値を有つや田畑金錢の懸ても及ばぬと云物デス其道理なる者の事實を手廻く云へば例令は徳利に酒を量入るゝに付ても自然の道理順序と云が有る先づ第一着に徳利の口に承壺を挿す第二に升を取て酒瓶の引栓の口に直す第三に引栓をひき酒を升到盛る第四に酒を承壺に注し以て徳利に収るデス是則徳利に酒を量るの順序道理と云物で有ル斯く順序道理を盡して酒を量れ

は更に一滴も溢漏るト無く能く満足に徳利の中に収るデスされは商買を爲るにじても彼道理順序にたがひ五本の指の活動くまゝ間斷なく骨身を浚れば二割なり三割なり利益を生ずる其レを積かさねて順序のまゝ活動けは必ず相當な有餘を生ト生涯が誠に安樂にゆかるゝ然るを夫レでは遅緩とて階子の段の三段も一足飛びに彼鳥餅で馬と云様な投機商買に早道をかくるから遂千日の功を一日に滅すと云者其上濡手で粟の一攫千金に潤益た金は自身は固より子や孫までナニ金と云は懐手で居てゾロゾロと蝦見見た様湧出る者と心得るから遊蕩や何かは蒔散らすにしても惜氣が無い所を骨身を浚つた金と云と何は現をぬかして居ても金錢の顔に名殘が惜うで跡先を見る心がおこるダカラ自から身代財産に永續の習慣がつくと云者デス

サテ此道理と云者は吾輩人間が今日用ひると用ひぬに付其効能驗しの明白なる實に醫者の藥などの及ぶ者では無いソハ差當て人間と禽獸との異も智者と愚者との異ひも君子と小人の差別も全く此道理を履むと履ぬの差別に出るトで人間の上等

下等も矢張此道理分の多分なると小分なるとに由るゝでス其割合は丁度赤銅地金の良悪の様で黄金地金の少しでも多く交つたのが上等の赤銅で人間も其通り總体に付き七八分道理を有つと云人物も有れば五分ぐゝ位のも有り丸で無道理無闇と云無の字揃ひなのも有ると云者サテ無道理無闇では一日も先さへ歩まれぬ直ちに獄に入り徴役にはまり碌な月日の下に居る事は出来ぬで有ル

亦其道理を用ゐると用ゐぬに由て生活萬般に大變快樂と危險の差ひを生ずると云者ソハ彼犬猫社會は固より道理も譯も見分け無き故土用の時候となつて情欲が兆すがいなや赤も駸も三毛も斑黒も其牝牡誰彼の分ちなく出合次第腕力にまかせ其慾を遂んとするから噬あひ喰合ひ軒よりおち溝にはまり血を流し半死半生の慘狀を現するところである亦食物に至ても魚棚の生魚臺所の飯櫃見當り次第隙が有るやいなや遠慮をなく會釋を無く噬へ出しかけ出すと云者も忽ち魚かぎを打こまれ荷ひ捧に打たれ體を傷り脛を折り命を失ふゝでス斯く夫婦の間でも食物の上にも樂々を行なふゝの出来ぬと云も必竟道理と云大事な器械を打捨て用ゐぬに出る

一デされは人間に於ても此通り道理を打すて恥を構はず色情に耽り利慾をむさぼる者は是則ち禽獸に近い人物でおのづから亦其結果噬合ひ打合ひ血まみれと云様な禽獸同然な淺間とい慘狀を現するゝで是皆道理を捨て用ゐぬに出るゝでスされは人に於て彼犬猫にちがひ安全快樂な夫婦の交誼飲食萬般の満足を取んと思はゞ少くも道理を多分に萬づの事に取用るべきゝで其道理とは外でも無い夫婦の上に付ても先づ縁を組んとしては性質品行教育の如何を詮議し父母の差圖を受け媒灼を頼み戸籍を移し結婚の式親類近所の披露目其條理手續きを盡した以上天下晴ての夫婦と云者また飲食所有財産に至ても夫々買受け譲り渡登記の手續きたぐひ一々所有すべき條理を盡した以上誰はゞからず一點の打手も無いと云者然るを親の許さぬ不義いたづら逢れぬ夜半は血の涙まゝならぬを詫ちては野の末山路よふみ迷ひ果は淵瀨よ身をこづめ或は我夫ならぬ夫がさねには血とほを絞らし親や夫を後ろに可愛子をもふりすて、往た先では何所の馬の骨やらとさけすまれ戀しい子にも此世で逢れぬ身と成はて故郷の空をながめては我身の罪我身を

せめ明くれ涙に袖のひる間無きも唯一時の迷ひに此道理をふみはづしたるに由る事デス又金銀財寶所有物に付ても不斗した食欲に迷ひ詐欺騙或は竊盜強盜追剝放火と種々な道理をふみ破つた所行に忽ち縲紲の恥や獄舎の艱苦苦役にくるしむのみならず結句の果には生命を縮むるに到るも皆是天神の各自の生活を安全ならしむる爲賦命られた道理といふ者をふみ破るより出る事で實に身の咎身をせむる物デス

時に座中の或一人進み出て問曰以上の説話他は適切にして頗る感服せり唯驚き入るのは惟神の一條なり抑も惟神の語は紀の孝徳天皇の御紀に出て惟神我子治すべしと故寄玉ひき」とあり此語は唯神の詔命の任てふにて皇祖天神が皇孫天皇に日嗣の御位を御授けなされて「神の詔命のまに〜知しめすべし」と事依り給ひしを云のみのにて更に別段の趣意無きを吾子の説の様では吾輩人間の手足の活動や精神の思想をも是が則ち惟神の道なりとは抑も何の書に出たりや驚き入たる牽強附會新奇の僻説と云べし請ふ其辨解を聞かむ

答て曰惟神と云詞は如何にも孝徳の御紀に出たる語なるが其他萬葉集中にも式の祝詞等にも見えて彼是に於て少さか其主意違ひたりされど專要なる趣意は神の命のまに〜と云が其本旨と聞ゆるデスサテ右に由て云に總て天地間の有とあらゆる事は悉皆天神の賦命に遺るゝ無きは既に上に飽まで云たる通なれば固より人體手足の活動も精神の思想も神のよりつけ神の詔命のまゝなる事は更に論無きにて彼古歌にも「君見れば産靈の神を憾めしき無情人を何作りけむ」とも有れば無論精神思想も神の所作デス然る時には是を神の詔命のまゝ則ち惟神の道と云て何の差支ら有るべきを分りきつた説話テ兎ヤ角詞を費す程のことも無いでアル又問て曰今吾子の説く所を聞くに吾輩甚だ快よからず思ふなりソハ先づ神祇の功德を稱して人體の構造より彼鷲や虎に爪を生じ水鳥に水かきを與ふると云類ひ是全く耶蘇教者の説く所と同一の説をなす者なり其上我天神を以て天地間萬物萬事を主宰し給ふと爲るは所謂る歐米に云造化の神に混雜する者にて是實に宗教の神にあらずや抑も天神は我皇室の皇祖皇宗にますを彼上帝とか耶和華とか云神と同

一にするは實に祖宗を穢す者と云べし其辨解いかん

答て曰我天神を造化の神とする事は古事記の序に三神造化の始を爲しと明言せられたる以上今更如何に嫌つても否と云ても仕方無しまた天神地祇が一切を生作り主宰したまふと云は万葉にては「千早振神の持てる命をも」と云亦「靈幸ふ神も我をば」と云狹衣には「前の世よりむすぶの神の爲置給へる御契なれば」と云空穗には「人しれぬ産靈の神」と云詞花集には「心さへむすぶの神」など云ひ猶奥義抄に「萬の物に宰さされる神なはず」など云へるを見れば古へ上流人も下さばも常に神は吾輩の身の上の萬を統り給ふなりと思ひもせし事なりと見ゆまた我天神を上帝或ひは昊天と稱へし事は桓武天皇天神を交野に祭らしめ給ふ祭文に「敢明ヲカニ昊天上帝ニ告グ」と宣給ひまた文徳天皇の田原の山陵に告しめ給ふには「今月廿五日河内國交野ノ原ニ昊天ノ祭爲ムトシテ」と有り然れば夙く朝廷にして然昊天とも上帝とも稱へ給ふ事なるを今更如何せん其上吾子の説の如くすれば吾日本の天神は世界の天神と別種にして日本一國のみ屈み給ふ

實に世間狭き神とならせ給ふなり彼は世界萬國を主宰し我は日本一國而も朝廷をのみ守護したまふとすれば我天神の御領分が誠に隘く少くなる其レを所謂自ら侮りて人之を侮る者にあらずして何ぞや能く願ひむべきトテス

### 第三 性理附タリ 俠客松本幸四郎を撃つ話「孟子四端の説の俗講

並ひ人體及び禽獸虫魚天賦保護の談話

本性とは造化の神の此吾輩人間を生作り給ひてより之を其まゝ蛙兒のわれたを見たり様に生ずてはすれば千に一ツの取留めも無き様の者夫故親は子を愛し兄は弟を愛し夫は妻を愛すると云自然の本性を神が生付給ふと云物でアルされははかない非人乞食でも犬猫鶏でも吾身のひたるさを耐へて吾兒に喰せせ腹の下に温め翅の下に羽ぐゝむといふ者彼炎天の大暑中に夫を助けて車力を押す女が汗水垂しながらも猶脊中の兒をゆすり其顔をねぢ向ひて見る其切なき神の此より付無くして賤しき女にどうして此情有るべきぞ是ぞ則ち天の授けし本性心と云物テス此心をすて、慈愛の心なき者は實に天に反く罪人テス天罰詠して許さざる所て有る

サア此心は親子夫婦の間にのみ有るにあらす世間の諸人一國同胞に向つても自ら相愛し相憐れむの情を有つ者で而も其道理正しき人を喜び愛し非理を惡むは千人が千人万人が万人同トき本性と云者は謂ゆる此懿徳を好むと云者ですされは觀劇に往ても高の師直を鼻負して大星由良之助を惡む者も無く定九郎に方人して與市兵衛を打倒さんとする者は一人も無い夫に付て爰に一條の話柄が有デス

ソハ最前また東京が江戸と云て居た時代に俳優に松本幸四郎俳名錦升と云が有ひ代々醜惡の敵役を家の藝とし其名を知られしが一年天下茶屋復讐の劇曲當麻三郎右衛門と云に扮出せしに其日土間の中央に魚河岸の若者俠氣風の客三四人有て精神をぬかして見物せしが時に彼三郎右衛門なる者が同氣の惡漢數人を引連れ躰足となつたる林伊織と云を乞食木屋より引出し汝が分際でかたき呼えりエ、狀を見ロと土足にかけて踏にやり或は面に唾をきかけ飽まで暴狀をきはめ漫殺しと云場合衆皆無念の齒を喰はりと折から彼魚河岸の三四人思はず一度に立あがり腕をまくり舞臺に躍り上り已に極惡にくしとも惡き振まひと幸四郎に向ひ拳の雨あら

れ散々に打んとするに爰に皆々驚き支へとの舞臺には藝半は幕を引幸四郎儀不慮に急病おこり暫く失禮の段口上を演るに彼三四人は夢の惺たる如く茫然と今更面目無く狐鼠く逃おりんとするに樂屋より幸四郎が弟子かけ來り各々様には幸四郎儀ナヨト御禮申たき筋有之何とぞ向フの茶屋までと云に愈よ三四人は底氣味わるく逃んとするを強て引止め案内するに暫くして幸四郎衣服を改め出來り今日各々様よは幸四郎が醜惡の所作眞實成熟せしを御見とめ下され候段實に先祖以來勉強の功相顯れ家の面目末代の名譽誠に有難く存ト候就て聊か喜びの爲一獻差出度御引止め申候何とぞ緩々御食用下されたしと弟子もろ共響應するに魚河岸連は彌

よ夢に夢見た様で種々馳走にあひ歸たとの話ガアル

嗚呼人試みに思へ一体此三四人が所行は一厘一錢の利益主義でも無く人譽められんの名譽主義でも無く全く彼三郎右衛門が非理に非理を重ねて多數の腕力にまかせ正道正理の伊織が權理を犯すが上に犯すのを此三四人が腹の中に存在せる公明至正の天賦の本性が耐へさらす思はず知らず躍りあがつたと云物であるされは

吾人各自の心腹中に公明至正飽まで非理を悪む本性心の存在して居る事はドエド  
 コまでも相違無き事にて此一條は吾輩徹頭徹尾孟子の説に賛成を表する「有ル」  
 サテ其孟子の本性の説は有ふれたる者なれど山間の爺婆や兒伴の爲に早わかりの  
 講釋を一ツ致すでアルソハ一体吾輩人間の身體には誰も彼も千人は千人万人は万  
 人彼仁義禮智と云ふ結構な本性心を具へて居る「有」で但しソウ許云ては中々承知が  
 往くまいが其確乎な證據は總て人間平生の所行の上に自然と顯れて蔽みきれぬ者  
 でスソハ例令は爰に僅にヤット這ならつた位の西ひがしむわからぬ稚兒のが古井  
 戸の井がはも壞れたのに這かゝり今や眞逆状におち入らんとするを見ては如何な  
 る熊八とか權太とかの心をなき野蠻的を男でも思はずハツト脇の下に冷汗流し走り  
 よつて抱上ることである是が則チ物を不便がる仁の心の吾人の心中に具はつて有る  
 證據でアル

また他人が突然吾身に對し「己大きな盜賊だ」と云た時には如何なる柔善のなまぐ  
 ら男でも「何時竊盜したを見とゞけたか」と躍起となつて腹立つでアル固よりさう

坊と云れたとて痛くも痒くも無いけれど斯く聞かぬ氣になるのは是が則チ人の濟  
 ぬと云義心の吾人の心中に具てる證據で有る又途中などで知己に出逢た時其人が  
 「どうかア御先に」と挨拶するといかなる無貪着な龐暴人でも必ず「イヤ先ッあ  
 なたから」と會釋する心が起る是が則チ人の心中に自然禮儀と云者の具てる證據  
 で有る又三歳や四歳の何の勘辨無き幼兒でも美しくい物ときたない物をさし出せ  
 は必ず其美しい方に手をさし出す是が則チ觀是なき子の心中にも物の好し悪し身  
 の損得を分る智の心の具はつて居る證據で有る

さて以上につゞきの孟子の説に由て小生が尾はねを添へて伸るに誠に吾人人間に  
 は此通りたれもく千人は千人万人は万人かく立派なる仁義禮智と云本性を賦命  
 つて居る其レは上に云通りつゝまうと云てもつゝみきれぬと云程に確乎に我身に  
 具はつて居るので其端小口が思はず知らずあらはれ出ると云者デスサテかくはこ  
 づが現れたらかに具へてる以上決して我身は仁義禮智と云者は倒底行なふこと  
 の出来ないと云ふ事は出来ぬ又我身は彼聖人と云上等な人物となる「有」出来ない

と云うはならぬと云者然るを吾人此全美な本性を具へながら寶の持腐と云様に持腐らかして無理邪理に小人とか悪者とかに成つて仕まうと云者です  
抑も仁義禮智は此通りはし小口の現はるゝのを愈よみがき立益々成長させる時には其身は上等の聖人となり其身体は健康で長生きに其家は富み榮はて熟和に其子孫は幸福繁昌しかも人からは譽らるゝと云様にソレソレ万能膏にも百倍まして實よ何に付ても此上無き全美な道といふ者ソハ其筈前にも云通り神が吾人人間に満足に生活をどけしむる爲もり付られた物だから尤もさう無くては叶はぬ事である  
また此仁義禮智の中でも先づ仁と云が根本で仁の字と云は人偏に二の字を書き人と人と二人相交はるに自然相愛する人情ある之を仁と云のでスされは仁は愛の理とも説てあるソハ彼稚い兒が井戸に陥らんとするを見て思はず知らずハット思ふ飢るさ耐ゆる干然がいぢらしさには思はず涙の出るが愛の理でスマア一体かう云風に天神が人間相互の交際を満足する様に此本性を懇ろに賦付られた者でス  
また天神はかく精神の上に深切なる保護を下さつたるのみならず此身体の百機千

關の上よもくま無く往わたつて一々注意の往届きたる一實に一席一座の話の盡す所で無い然し細かな話は却て諸君睡のたねだが極大略に早了解な所を伸ると先づ人間の萬般を知覺する筋脈是がかの神経と云ので頭腦の蓋骨の内面からおこつて左右貳十筋之を腦神経と云て目耳鼻口喉胸の内臟腑悉皆に往わたり又脊中の脊髓より起る神経六十筋手足全身に往わたつて百器の活潑をつかさどる其さま宛然操人形の糸の如くなので其神経の末先毛筋の様で布目の如く往わたつて知覺するから足の爪先に松葉の一本を置いたのも直にアイタと知覺すると云者です  
今ではモンナ位の一は小學校の兒童でも大抵承知してゐる一だが先づ目は其眼球の内に葡萄液とて透渡つた液がみちて瞳孔より萬の形象を寫し取るを其奥なる神経が知覺して一々の形を知りわくる様に作り鼻には嗅神経とて萬の臭を知分る神経わたり耳には其奥に鼓膜とて大鼓の皮を張たる如きのが有て萬の物音を空氣と共ににおくり込むのを聞神経に知覺すると云者ソコデ年か往くと其大鼓の皮がたるんで耳がとほくなる一デスまた舌はアノせれくとした物が顯微鏡で能く見ると一



面蟻の足の吸口の様で之は神経わたり甘ひとか辛ひとか甘美とか味ひわくると云者ソユで火鉢の火でも飛ぶが否や目ぶたを閉ぢ手を引こむると云のでヌムし神経が知覺するコ無いならば人間は目がつぶれうか手が焦るか足が切れうか食着なくからたは見る間に臺なしにするので有ろうソユは實に有難い者でヌ  
 また胃の右の傍らに肝キモと云が在て其中に膽ると云が係つて居るが此肝膽の液と云者を焦黃色で誠に烈しい苦い味ひでソル此液はすべて飲食物を消化するの効能を持つてるが人が飲食して胃が満張と忽ち小腸の頭が肝膽を押すのでソユで彼苦い液があふれて腸胃に注ぎ食物やうく消化し其送下しを速かにするといふ様な仕懸に作りまた肺臓を空氣を蓄へた袋でヌが其下に心の臓とて血の本かたと云所が有る血は一体望素にて燃る火のふすほるが様で之に空氣の中なる酸氣を興ふる時は丁度竈の火のふすほるのに火吹竹で空氣を送ると同じ理由にて其游血たちまち鮮かな新血となつて巡環が好くなるると云者でヌされば人が運動すると自然と突く息が烈しく肺の臓あほりて酸氣を心血に送り血の巡り極めてよろしく身體

健康無病長命となる仕掛と云者である此他咽笛は氣息の往來故少時も塞つてはならぬから軟かな骨で作て而も其入口には飲食物の進入せぬ様小さな片膜有て其進入を防いで居ると云様に何から何まで往届いたコで有る

サテ吾互人間身體の構造の咄えザツト此位にて切上げのこりは天道神道の部にて話ととして是より鳥獸虫魚の上に至てそれく授つてる所を是また本の搔つまんた御話をするると先づ鹿や兎は其天性やさしく唯木の葉草の葉を喰て其のみの事故牙と云者は無くして唯臼の様の齒ばかりでヌ而も鹿などには舌に力ありて木の枝を引よする様に授け然していつも虎狼犬などより追はれにぐるが一派故其耳の屏うしろ向に付て後ろの音を聞くを專要に作り虎狼はまた夫と反對し年中物を追ふが常ゆゑ其耳のは前に向ひて前の物音を聞くを專要とするると云様作られて有るといふものさて此鹿兎と虎狼の關係より推して天津神の吾人の上の御保護の往とゞきてるが知らるゝでヌソは餘りに山に草木が繁茂しては丸で往來も成らず困る故ソユで鹿兎と云類を作り草木の繁茂を能い加減にするのサヤ所が其鹿兎がまた増長すると丸で山はばけ

山になすかも知れぬソユテまた虎狼を生トて鹿兎の間引をすると云者ダカヲ日本の様に山も浅く且つ御正統の天皇のまします國なごでは獅子ダの虎ダの人間に害なす様の獸は無き事に定め狼さへも道々人間が山林の保護の往届く今日の有様に成ては次第に無くなるも自然の道理でス

さて天神の保護の摸様を今少し話をすると一体此世界と云者は小の肉は大の食と云様に假に小を奴は其上に居る大を奴から喰れて居るのでソハ漢籍で云様榆の木枝に一疋の蟬がとまつて露を吸て居るサウすると此蟬を目かけて後ろから螻蛄が鎌を上げて窺がつてる其また後ろから黄雀が口をウクソカまきりを窺ひ寄て来る其また跡からは吳舍人と云小童が餌差竿をザットそはめ瞳を凝じて彼黄雀を窺てると云者総て萬物皆此通り其小の肉を段々大が喰のはつて来りつまり全く靈長株邸主役の此御互が賞味するの本となると云者で有がたい物でス

此他小鳥はすべて草木の害虫をとる者と見ゆるが先年米國で雀が穀物に害をなすの論有て大造之を捕獲しに其年大變害虫が跋扈し雀の害に百倍せしと云咄サヲ木の虫で通常のは夫ダが幹を喰はがして入た虫は爲方が無い様ダガ彼喙木と云鳥は嘴の先が鐵の如く舌の端に棘針が有ると云者でドンな奥に入た虫でも遁さないト云様に御せわが先から先まで往届いて居る猶蜂には蜜を取るため糸の如き舌が具はり驚鷹萬百舌と云様な同士を取り肉を喰ふ鳥には鋭き鎌鷹口の様な爪や嘴が具はつてる牛鹿の艸を喰つて化し兼る質には艸をつき返ス胃を具へて居る蝙蝠は飛で手足が無い其代り翅のはしに鉤有りて能とまる蜘蛛は飛虫を喰ふに羽根無し夫故網を張る道を具へ鳥賊は墨を吐き蛞蝓は滑涎を吐き以て其害を防く獸には毛が有り鳥には翅あり魚に鱗あり貝類には殻ありて身の害を防く様具はり猶羊豚鶏をぞの自ら守るの具へ無き者は乃ち罕や栖に歸るコを知て人間の保護を仰くと云割合にそれ〜が賦命をそなへて居ると云者でアルされは亞細亞の中央大沙漠のあたりでは河も無く海も無く實に運送に爲方が無きにソナ所には則ち彼象たの駱駝ダノ云自然天然重荷を負て運ぶ質の獸が生トて不便を助くると云道理是則ち神の賦つけと云者されは象が嶮き阪を下る折には荷物の傾かぬ様後足を折り

て下ると云うまた駱駝が其胃のかたはらには膜袋二十以上三十程も有て中に清水  
ミち蓄へ炎暑中沙漠旅行に渴きを助かる様に作り猶足の蹄は中くほにして砂には  
まらぬ様また膝がしらの皮を石の如く厚く熟砂にもナヤツと耐へらゝる様具はつ  
て居るトデス

さて以上の通世界中の萬物をれく自然其おのれの生活の道に於てたらはぬ事無  
く神の賦命けたる道是則ち本性と云者で此賦命のまゝを誤る時には其事成就せ  
ざるのミならず大いなるより損害を引出る事です例令は牛は重荷を引き耕作の助  
けをするが其本性で犬は山獵に従がひ獸類でも追出すが其本性でス所を取ちが  
て牛をひいて山獵と出かけた時には兎どころの話で無く嶮き山阪では牛は吾身  
一ツがヤツトの事で何一ツ爲出かしをせぬ是に易ふるに犬を以て山を獵するよ於  
て人よ百倍増した功をなすまた重荷を引き耕作の助けに至ては犬は牛の百分の六  
も出来ないと云ものは皆自から天より賦命られたる自然の天性と云者です  
然して此本性の上に自然きまつたる規則の有るを是を性理と云てスが此性理と云

者は宇内万国で大變有力な物で此世界億兆をこめくゝる法律も教育も政法万般皆  
此性理を以て根本とせないのでは無いです彼宇内各國の交際をまどむる万国公法と  
云も全た此性理が柱となる事であらう云理屈で性理は神が此吾輩同胞もろ々々に  
生活の満足を與ふるためありつけられたるは相違無いデス夫から推じて法律も  
教育も政治も即ち神を以て其根軸とするは勿論なるに方今世の中の碩學とか博士  
とかいふ先生たちが大抵有物學者で物の外更に一物無くとすまゝに居るとは古  
來神國と稱ふる我日本の國体に對しても随分困りはてた話と云ふ者です猶此委細  
の辨論は下に詳らかに演るトである各國公法と神道との關係は國體精  
華の第八章に伸たるを見るべし

第四 天道「並に道の本原神に出る」速刺哲の神の話「胎内十月の状」

附り死生の根本の「天罰の論」

天道また之を天理とも天則とも云人に受ては之を人道と云また性理とも云ト有  
るさては既に掲げた人道や性理の演話でトは済たる筈の様だがソコは猶云ひたい  
所がまだ一澤山をソハ從來天道の人道の講説と云と彼漢籍で十三經の注疏

がら四庫全書の大抵佛書で三藏須多羅の一切經皆天道人道の關係のない議論は二ツも無いでス我國の書籍も粗其通りで實に馬鹿々々しい程なびた、しいが其夥しい書が肝層の天道人道の由て出る根本を大抵曖昧模糊の説よてすまゝこんで居るのた夫でサツハリ一ツも益に立たないと云者から爰に掲ぐる天道と云一問題には其天道人道の由て出る所以を專要と御話する心算である所が天道其物こそ實に萬法の根本洪大深遠一朝一夕の能述べ盡す所が無いのは固よりなれば本の搔摘んだ説話でス

一体此世界で道と云者の世に立たる事の物に見ゆる始は我日本の古典を以て第一とすそは古事記の發端に「天地初發の時高天の原に成ませる神御名は天之御中主の神次に高御産巢日神次に神産巢日神」とあるが天御中主とは天とは世界にて此世界の中央に鎮りて萬物万理の中真となり主宰と給ふ由にて天御中主と云へるなりサア其御中主の神體分れて成ませる神を高御産巢日神と云が此高と云のが謂ゆる陽氣の主宰なる由にて次に成ませる神を神産巢日神と云此神と云言が謂ゆ

るまた陰氣の主宰なる由で其由を猶伸れば高御産日の高は。武藏長竹鷹。など皆同義にて武とは猛く剛勇なる義嶽は山の高き所の名長は物の勝張したけ太るの意竹は能延ひ生長するよりの名鷹は猛き鳥なるよりの名以上を推して高とは萬の物の生々發育勝張するの義にて則ち陽氣の徳を稱するのたへ名である  
また神産日の神は噬株固ル籠蜘蛛など皆音通にて同義なりまづ噬とはかみじめ吸ひ寄する意味とは寄固まつて一團結をなすの義また固むる籠などは物の牽縮まり柔しくへり下るの意蜘蛛は能く籠り縮まるよりの名なり以上を推して神とは萬の物の縮少衰微固結するの義にて則ち陰氣の徳を稱するのたへ名である古へ神の名を稱するのは自然其徳と其所行に由て稱へをむる事です故推て知らるゝなりさて此二神互に陰陽の一方を主とどり給ふを御中主神其陰陽を和合し中和の徳を施として天地を位し万物の生育を満足せしめ給ふ事である

猶其事情を手ぢかく例令て御話すると爰に一合の水がある之を陽氣の徳なる温熱蒸發の氣一偏にまかする時には其水は次第に沸あがり勝張發散湯瀲となり水は遂

に其形を失ふテス其時にかの陰氣の徳なる寒冷縮少の氣を興ふる時は湯瀉は  
 忽ち牽縮して水となり遂にまた固結して氷となり水の形を失ふテであるかく陽  
 氣にても陰氣にても一方は偏よる時には遂に其物の本分の徳を損ない見るべから  
 ざるに至らんとす爰に御中主神其陰陽寒熱の中央に在て偏よらずかたむかざるの  
 中和の徳を施し給ひて則ち天地位し萬物各々其本分を全ふするテ是則ち天地  
 間道の實體と云物である支那にて大極兩儀を生ずと云テのあるがいかよも此古傳  
 の能似たれどかく御名より推じて其執中の道を施したまふ確説なき傳はる事の無  
 ければ猶我國の古典を以て道の傳への最初とはなすべきテス  
 さて猶云は、一體世の中に病と云者も無く藥と云も毒と云も無き事です所を人間  
 が跡先見ずの飲たり喰たり爲たり心配するやら慾はるやら一方に傾むくテばかり  
 で病と云者が出来るでス但し其間には先天されは病と云者はいつれ右か左か一方に引  
 付るの多から醫は意なりで醫者は注意を以て左へ引付た病なら右に引付る藥をあ  
 てがふので其引付たを丁度中すみの中庸に引もどし落付かせて眞確な身体となす

丁テヤ所を藪的の醫者であると其加減を取はずし無症に藥を盛るから折角まんろ  
 く成たのを其眞確を通りすてして亦ぞろ今度を右へ引付る病を藥でわざく作  
 り出すと云様を都合でスかう云物で實には天地間には更に善も無く悪も無く毒も  
 無く藥も無いでス唯其間一方に傾むくのが悪であり毒であり其傾むくのを眞確に  
 直すのが善であり藥でありと云理由で世界萬國眞理といふ者も中庸にある事で何  
 はさ好い事でも度をすてせば則ち悪事となり毒となり社會の害物となる事でス  
 されは天地開闢の前キ先づ天神が世界の萬法万事の規範雛形として御躬自の御形  
 をかく陰陽剛柔相中和せるの象と顯して天地世界億万世億万方に渡り道の眞體を  
 示させらるゝと云者でス然れば支那の古へにも易には「乾元元萬物資として始る」  
 と云禮記には「禮本本於太一」と云詩には「皇矣上帝臨下有赫監觀四方」と云老子  
 には「太古之時有物混成先天地生云云以爲天下父母字之曰道」とも見らて上  
 古は人間が正直に深遠の知慧あるより此道理と神とを全く一體同致の者とあて居  
 たのテヤ所を世が開くるに從がひ小知慧のみさかなく高慢の鼻高き風となり爰に

於て學者皆思へらく人間の上に別に神と云者有るべきやは此世界は全く吾輩人間の智力に依て此文明は開かれたりと論にも書き行ひにも行なふより頂上人間と神と縁を切り横着自儘の悪風俗と成果てた是が則ち世の輕薄となる所以でス  
 また上に云中庸の道は云た通り天神の天地の眞理を現はしたので有るを大かたは支那の子思と云の新發明で專賣特許でも受た道の様心得て居るが決して左様で無い其始大皇伏羲氏が仰いで天文を觀伏して地理を察し日中すれば長き月滿れば缺ぐると云様に万事万法偏よれば損ない滿ればかぐるされは其中墨を以て中和の道を取るべきを觀へ得て道統の源をたせし所以である堯舜よ至て其道を中興して中を執るを以て四海平治の要道とせりされは支那歷代之を傳へて周の朝廷に及び中庸を以て教科の課目とせし周禮に見たりと物徂徠は云へるでス  
 さて斯く天神は吾輩人類の精神身體悉皆の大祖とあるを忘却するは支那日本はかりて無く西洋にも昔から有るでソは外教の昔話に彼奇臘の聖人と云はれは有名なりし速羅哲が或時一人の弟子を引つれ其都會の市街を彼是遊覽して有るに

此弟子固より在所をたらの物珍らしく右左りの店前キに種々な物が飾つて有るに殆んど看版であたまを撃くも覺ぬ程に無症にながめて居るが或店に玉を彫刻した偶人が一ツかぎつて有るに目を付け卒度速氏の袖をひかへ何と先生一寸御覽なされアノ偶人の鼻脚口許さながら物を云ひそふな顔付キ誠に上手な手際と感入て詠めて居る速氏は横目でシロリと睨み何と大造な感心の爲様ダが其上手と云のは其名を呼びかくれは返事をし手招すれば歩みかけてデモ來ると云のカへと謂れて弟子は不承知な顔付で固より玉を細工した土偶人形ドウしてさる事が成マセウソト冷笑ふに速氏は立返つて然らば若し今爰に名を呼は返辭をし手麾すれば歩みかけて來ると云細工でもした時には何と其方上手と稱るかいと云へば弟子は答へてさる細工が有れが上々の上手ダが廣い世界にもモ其な細工は有ますヤいと空嘯いて打笑ふに速氏は見て何と是レ學問を爲すも吾身の性命身體の根本を知るが先ッ第一專要の事なるに汝は今左程に彼玉細工を感心する程ならばナセ此市街に澤山往來して居る此人間を感心セナイソヤ而も人とも云はず吾此身體を何と云ふ

ふ是乃ち謂ゆる數十元素の分子を埴たてた土偶人形で夫がサマ名を呼べは返辭をし手摩きすれば歩みかけて來る所か鎌を取り筆を取り自由自在の活動する事である此造化の神の細工の巧妙に氣付ず感心しないので彼僅な玉細工を感心するとはエライ遅蒔な話ダハと云はれて弟子も閉口で有たと云フダガ如何にも此通り人間とは必竟何ダと云へは全く彼數十元素をこね立て土偶人形に相違は無い夫がさて返辭したり歩行たり録取筆とる位は愚か鉄を取り槌を取り箴をとり針をとり開拓とか製造とか掘るとか鑄るとか織るやら縫やら種々薩埵の事をなし奇々妙々の有様を現はすのも全く天神造化巧妙の細工に出る者でス

されは古今に開化とか革命とか聖賢とか命世とか智者とか豪傑とか小理屈をひねくり已瀬天狗となり大僧正坊となり天上天下唯我獨尊と喜摩刺亞大の鼻をうごめかすも皆是土偶作の所爲にて必竟土偶作の内にて小智慧の有るのを大閻とか奈勃翁とか孔子とか釋迦とか韓圖とか斯邊瓊とか小奇麗なのを小町とか揚貴妃とか名付たと云者で夫から戀とか色とか結局小土偶をほぢくり出し情とか孝とか無常と

か何とか或は笑ひ或は泣き喜ぶやら哀むやら森羅万象種々様々奇妙奇天烈無盡蔵の景況を顯し到る事である

嗚呼つらく考へ見るに吾人の此身体を受くる誠に微妙不測いかにして斯る細密なる器關が斯く全く出來しやさうじてかく満足に違損なく生涯能く保存せらるゝやと懸念にて彼跡先見ずに酒を飲み色に耽る人を見る毎に想ひ遣るゝ事でス抑も此吾人の身體千器百關の大造なる鬼にかく天地神明の冥助無くして斯く全きを得る事有うぞ能く思ふべき事でス彼醫書の云所に依るに吾人の身體の始て生ずる先づ婦人の子宮の奥に刺巴の形せる管あり刺巴管と云其中に卵巢ありまた男子の精液中に僅に顯微鏡にかゝる程の極細微なる活物あり其形全く蝌蚪の様でスと云さて其精液婦人の卵巢にそゝぐや彼細微の活物其中の一卵に噬付くや爰に則ち始めて陰陽の氣和合し胎を爲す者なり然して是より母の經水とゞこふり十月が間子宮の周圍に在りて温め養ふさま宛然釜の中に物を入れ周りに火を燃してむじ立道育せしむる有様なりと云へり

大國隆正の事を則ち産靈の徳ととなふるなり

古へにては此御徳に報ひまつる心得は元よりてあつく常に萬般此御徳にすがり申す事は仮そめの口の端にも出せし事なりとは和名抄に無須比乃加美と記し字鏡にウムスヒマツリと云狹衣に「前の世よりむすぶの神のしおき給へる御契り」と云空穂には「人しれぬ産靈の神をこるべにていかゞすべきと歎く下紐」とも夫木集には「とけやらぬ人の心はつらからでむすぶの神を恨みつるかな」とも其他擧るにたへぬほと澤山ある事ですすべて火と水是陰陽にて此水火の氣和合してあたゝむるを産すと云なりとは暑中夕立模様など熟するをムスと云水のあたゝまりて生ずるのを虫と云生たる子を息子息女と云のも皆ムスビの徳に由る故なりさて此大本を取りほどこし給ふ神を産靈の大神とはたゝへ申すべしなり

さてまた上なる醫書のつゞきを伸るに始めて胎を受る五六日にして卵中一珠を生ず十二日にして其大きき白豆のほゞなり外つら細毛を生ず其体飯粒に徴を生じたる様なり其中に丸き物と長き物と有り其長き物漸く長くて兒の体となる廿日に至其長き者大蟻ほゞの物となる重さ約一分長サ三步此時粗頭身の状有りて夫かと思ら

るゝ程なり満一月にして長サ四歩大サ牛蠅の程であると云三十五日にして臍帯始て芽を出す四十二日にして口を見る四十五日重サ一匁長サ八歩臂と股と僅に見ゆ六十日にして手足全く生ず爰に耳鼻顯はれ下に肛門の体見ゆ九十日にして手足諸器械全く具はる爰に至り男女の見分け出来るでス五月長サ五寸此月比より母始て胎の活動するのを覺ゆるでス六月長サ六寸重サ十三兩此月髪の毛また爪を生ず七月長サ八寸骨節々々を整ふ此月産れたる兒に古來強壯の兒多きが聞ゆ八月長サ一尺一寸重サ五十五兩九月眼始て開く十月重サ五六斤乃ち胎満足し機とゞのひで晚れ出る事であるさてドンナ上手なのでも人間の力に及ばぬは此製作でス

さて亦其十月の間兒の身体の出来とゞのひ生長するさまを例のザツと活すと先づ御互此天を仰ないて見ると青々として居るのた夫がいほゆる六十幾元素と云元素の分子の世界中煙の如くにして舞まはつて居るのである此分子と云のは手近く云と木や火土水金と云類の粉に成てるので其木火土金水の粉は米穀とか海川の魚とか野菜とか酒とか茶とかは吸寄せられて其品々に含まつて居ると云物然して



其母親が十月の間毎日食事する米穀魚野菜酒茶と云類の内に含まつて居る木火土  
 金水の正味は母の胃の臓にて一々製造し乳糜と云乳液の如き物となして其臍の緒  
 より傳ふて兒の體に送り其骨内血液となして上の通り生長せしむると云物でス  
 れば此大造なからたが手足目鼻一點の間違も無く指一本の不足も無く満足に出來  
 るのは實に不測とも有難しとも云べきにて天地神明の御保護にあらずして如何  
 ぞか全からん何が一ツ不足しても餘つても一生片輪とか不具とか云入れて縁付も  
 ならず人前にも出られぬトとなる爰を想ひやりて平生正直信心の誠を忘るまじき  
 一である

贈從四位佐藤信淵翁の説に云原漢文今抑も靈魂幽冥より出て現世に入る各々宿縁有  
 て父に依り母に託す其生を投するや必ず冥使護して之を送る其世に在るや守護の  
 神之を隨がへ逐ふ其終りに臨むや來迎使其魂を攝しむる也と云ひまた長阿含世起  
 經の文を引て云はれしに佛は比丘に告て云く一切男女初め胎生する時より皆鬼神  
 有て隨逐擁護す其死する時の若き彼守護鬼神其精氣を攝すれば其人則ち死以上阿

文あるを譯せし是と記しまた翁語をついで云はれたるは「予人類在世の終始を熟覽  
 するに謂ゆる精魂胚胎して神之が主宰を爲む四資土水火風妙凝して之が肉體を爲す  
 其成長に及び意氣揚々として各々自ら得るが如し既に其始を知る事無し況んや其  
 終りを知る「有んや」と誠められたり人々能く思ふべき一なり  
 さて爰にまた恐るべき一條の話が有るぞスソハ中庸の文に「故天之生物必因其  
 材而篤焉故裁者培之傾者覆之」と有るのメが是が天神の世を保護せらるゝ目的  
 規則と見えて居る其趣意をつまびらかに伸ればすべて天の物を生ずる必ず其氣質  
 材識に因て見込有るよは篤くせらるゝトでソレ故裁て能育つ風なのは愈よ念比に  
 之を培養ひ傾きかよめきのは之を覆すと云わけで大根や青菜にしても素性宜く太  
 りそぶなのは愈よ培養でもするのたが始から屈曲たりたをれたりを到底見込の無  
 きのは間引となりポイント引捨らるゝと云者されは人間も此通り幼少から正直で勉  
 強で信心で親の云「能用ひると云様訖度行先見込のある子には愈よ神さんが學識  
 の人材を下され身も健かに幸福よく豪傑となさるゝトザヤ所が以上に反對して稚

さい時から吾まゝで遊びすぎで學問きらひで横着な不信心な質で到底社會の穀つ  
ぶしと云人間は神から見捨らゝる人物で愈よ性根も悪く不仕合せて揚句の果には  
肺病や流行に取つかれ頂上間引人間で引捨られて仕舞といふ趣旨の文と相見ゆる  
ナント恐るべきトモス夫では御互兼て平生勉強し信心してドウカ此間引の中に引  
こまれぬ様よく注意したきトモアル

第五 運命「武運の稽古」豊大閣志津ヶ嶽の一戦

奈勃翁の話「並ニ大舜の事」

むかし幕府の時代に江戸に室鳩巢先生と云れた名高い大學者が居たが或日若侍數  
人武藝の歸りと見を各々稽古道具なき肩にかけ入來るに先生云には何と各がた家  
業のトとて出精は勿論のトダガ拙が思ふ所では武藝よりも武運の稽古こそ一層の  
大事と存するトでソハ彼天正の昔尾張の國長久手の合戦に森武藏守長可は音に聞  
ゑるも猛勇でいつも鉄棒の如き大太刀を振かざり敵軍を薙たをすと云ので世に鬼武  
藏と呼て恐れしか其日も例の通真先に進み太刀振かざせしに忽ち敵軍より打出し

たる鐵砲がグワンと内兜に打込むが否や逆さまよ落ち一言と吐す相果しといかさ  
まかうなつては何が朝奈でも武藏坊でも剛勇でも大太刀でも何の功能も有はまな  
いかう云物ダカラ武藝よりは武運の稽古が餘ほご大切と云物でス  
斯いふと一人の侍が進み出で御説は誠に其通でスが但し僕の考る所では昔から運  
は天に在りと云のそ夫から見れば到底運は人間の力には及ばなかつた物と見ゆる  
其人間の力に及ばない者を今稽古せんとは随分雲をつかむと云様の話では有マセ  
ンかといへば先生頭を左右にふり否々左様で決して無いさて貴論の通いかにも運  
は天に在り天に在るから運の強い様祈るには第一其天の心に叶うやうせなければ  
はならぬシテ天の心に叶うには追取天の好む所を知て之に従かい惡む所を知て之  
を爲ぬ様専ら務むべきトモさて其天の好む所は何トぞと云に天は萬物を養ひそた  
て生々満足せしむるの仁徳を第一好める者なれば吾人平生誠の心を推盡し生々満  
足の天徳に従ふのが天の好む所にて即ち天心に叶ふ武運の稽古爰に有るなりと示  
されしとあるがいかさ至極おもむくも道理な話といふ物でアル

さて人生の有さまは先づ斯云割合を物ぞ何は富士山犬の鼻うごめかし曠世の俊傑  
 ぞとか英雄ぞとか威バツてもかなじい哉天地に作られた此身とて戀しゆかしの人  
 情ほしい飲たいの人慾はのがれ得ぬされは灘の正宗劔菱と牛の小便が一ツ味ひ蒸  
 と云たどて中々そうは思ひきれず如何に唯我獨尊とさつても耶輸多羅女の今  
 二八の蒼の面影肥の膏付たる肌の色は外に似る色もあらず無量の恨をこぼしたる  
 一滴のなみたには黒金の腹腸もとろけて夢の如くなるは是神の娑婆億兆の人心を  
 左右するの妙用たるをやかの速刺哲聖人謝安石英傑の山水の遊びも熔焼の美形を  
 携へせれば盃酌の味はひなきは人情ののかれぬ所にやされば或人が「神ならぞ何  
 を頼まん我ながら心にまかす心ならねは」と歎せしも實さる事ぞス  
 されは東西洋の雄名を轟かせ豊大閤でも奈勃翁でも天の助けを借らされは其功  
 を就す可能はす一タヒ天の咎をかうふれば其身の敗亡救ふよ力無し其有さまをい  
 さふか伸るに彼天正十年羽柴筑前守秀吉は亡君の仇明智を唯一戦に討平けしより  
 勢ひ朝日の昇る如くなるに柴田修理進勝家いかにしてか秀吉を倒すべきと肝膽を

しほり爰よ信長公の三男織田信孝を談らひ來春北國筋雪の消る比をまら信孝の本  
 城美濃の國大垣の城に立籠り秀吉に敵對の色を顯はされよさすれば秀吉直ちに軍  
 を出し大垣に攻かゝらん其機をはづさす我北の庄より大軍を帥て後口を襲ひ前後  
 より引はさんで撃んにはいかに智勇にたけたる羽柴といへども一戦に彼が首を見  
 ん事方寸に有と計策こまかに示せしにぞ信孝大に喜び翌天正十一年四月中旬大垣  
 に旗を擧げ立ちもりしに然がの秀吉かゝる深謀有りとは知らず更は大垣を攻破れ  
 と四月十七日江州長濱を發し同十八日美濃に着し翌十九日早天より攻かゝらんと  
 呂久川の此方に陣を取て居られしに其夜夜半より大雨車軸を流して降來り夜の明  
 るまで小止なきにも見る間に呂久川は逆まく洪水岸をひたしたるにぞ鳥ならで通  
 ふべき様も無く秀吉せん方なく彼方をねらみて止まり居られしである

かゝる所に廿日の午の刻早馬到着し佐久間支蕃頭不破原以下柴田の先陣唯今志津  
 ケ岳中川瀬兵衛の砦に取かゝり既に合戦に及ぶ一刻も早く御歸陣あれとの報に秀  
 吉躍り上り軍には勝たるぞ早用意せよと先づ足早にらはれたる徒士五十人直に

發足させ道々松明の用意酒辨當馬の食夫々百姓共に申付よ代價は倍々を以て褒美すべしと觸わたせと云付同日未の刻秀吉呂久川を發足せらるゝに途中日が暮るゝや山々は松明晝の如く酒辨當と荷ひ出すに諸軍十分に食事し其夜のあかつき志津が岳に着陣ある敵陣にて今比羽柴勢の到着せんとは思ひもかけず昨日の戦ひにくたびれ前後覺はず打臥したるに頭をあぐれば山々松明つゞきわたり大軍潮の寄るが如くなるに狼狽するや間もあらず彼いはゆる七本鎗の人々加藤虎之助福嶋市松片桐加藤脇坂平野糟谷の諸士眞先に進み敵軍を突くづすに佐久間玄蕃頭遂に総敗軍となりし跡にひかへし柴田勝家は一戦にも及はず北の庄へ引返し本城に自殺して相果し是豊大閣の生涯の運命を定められし分目の合戦でスさて熊澤淡庵子此軍を評して云へらく此合戦や大閣一生中天の助けを得られしが殊に較善しく見わたる者で其助けは實に呂久川の大雨洪水に在るでス若し秀吉呂久川を渡りてより大雨あらば志津ヶ岳の報知を得てナンボ引返したく天魔の足搔しても及ばぬでス亦此雨なき時には信孝必ず其後を追撃し退口實に難儀にて遂に

彼柴田勢と引はさまるゝにも及ぶで有ん信孝は追討せんとして洪水にさへへられ唯呂久川を睨みつめ齒がみをせられしで大閣は洪水に敵を支へさせ安心して引返されしなりされは勝家が深き謀ことは一々大雨に打こはされ大閣は一々大雨に謀ことを助けられ天下を平定せられしでス抑も鎌倉の世の末より天下乱れそめ爰に至て貳百五十年日夜干戈を取はやし諸民手足を置くに所なき天既に禍にあき豊公の手を假りて四海の泰平を致さんとせらるゝにも斯は殊更に其助けを下さるゝ者と察すべきである其に付ても吾人平生天の心を察し身を務め心を盡して天心に叶ひ其身の運命厚き様武運の稽古を勉むべきですまた彼佛蘭西帝奈勃翁の一時其志を得て千八百四年帝位に昇るに當り古今未曾て見ざるの材識雄略を以て歐羅巴全洲を薙の如く卷きたて和蘭を滅ぼし是班牙の帝位を廢し葡萄牙を取り伊太利瑞士日耳曼を兼ね併せ普魯士を割き奧地利を奪ひ噫國を浸し其都城を攻圍む實に向ふ所一人を敵對するゝ能はず各國恐れ縮み之を見るゝ獅子虎の如くなりしでスル此時や其勢ひ世界万国も之を撃平ぐるに力餘り

あるのさまなりと然るよ全盛の頂上千八百十二年五十万の大兵をひきる魯西亞を伐ち其舊都墨斯科を攻め圍むに及び魯國は最後の手段として自から墨斯科の全部を焼き拂ひ野を掃きて走り隠れしに天の咎むる所として此困却に加へて非常慘酷なる寒氣俄に到りしにぞさすがの奈勃翁帝食料を取り飢を凌がんとするも烈寒指をおとし肌を裂くを防がんとするも四方曠々たる焼原となり手寄べき市街も無く凌ぐべき所も無く士卒は十の八九凍死するに至る此機を見澄し英魯普塊等各國の軍は力を合せ鋒を一一攻撃つに奈帝幾んど敗走の体にて逃歸るよ諸國の兵は長く驅て巴黎斯の都に攻入りしより帝の軍愈よ大に亂れ加ふるに諸將兵卒叛き離れ命令を用るざるに到り亦爲すべきの術盡き千八百十四年其位を退き以爾巴嶋に遷さるゝに及びしで是を以て見るにも天の棄る所はいかなる英雄もまた爲す可能はざるや察すべき者である

以上の事實より推及はし猶天神の人生を保護せらるゝの厚き注意を加らるゝの深切無量なる所以今一ツ爰に擧ればかの支那虞の代の帝王大舜の事件でス一体世

人常に云天は善に福ひと惡に禍ひすと然るに此舜と云人は親に孝行なる可は先づ第一廿四孝の一の筆に置かれ隨て其他の品行推して知るべきの最上等の善人なり然らば天あくまで此人に福ひと快樂心のまゝなるべきに全く之に反對し其不仕合此上無きであるソハ舜の其父や其無理非道にして譯のわからぬ可幾んど瞽の如くとして瞽叟と名付しと云程の人物なり母は繼母にして繼母根性尤も甚く惡事を父に云こむでス其産たる弟の象と云は是亦豪惡明くれ舜を殺すを以て爲事とすと云様の可で實に三人揃ひに揃ひし極惡人間がな隙がな舜を殺さんと窺てる或時父が舜に云付藏の屋根が損して居る昇て之を修めよと則ち何氣も無く昇るや否や親子は階子を引き下より火を付て焼殺さんとする舜は之を見て南無三寶は殺さんとの奸なりしか我身の命は厭はねども父に其子を殺せし惡名を負はするは不孝の第一コハいかんせんと天地を拜して誠心をこらせしに兼て大きな笠を被りて登りし故其笠を手にし飛下りて兎や角怪我なく地に降りりとか亦或時は井に入て底を浚へよと命せしにぞ云がまにくゝ入たる所忽ち親子は土を降して埋殺さんとする所舜

は亦ぞろ驚きかたわらに身を寄せ堀のほりヤツと命を助かりと云てヌヤンと  
 舜の家内や僅四人の生活の其三人が日夜朝暮何時毒や喰するいつ暗打やする片時  
 も油断ならざる有状とは眞に悪鬼羅刹に包まれ獅子狼に取まかれたるより猶危く  
 其辛苦艱難の哀むべく恐るべきや譬ふるに物無きでアル

マア斯云ありさまに爰に世人は實に疑ひて天道は是なる歟非なる歟善惡理非の見  
 分なき物よやかゝる最上等の善人をしてかゝる慘まじき不幸に陥らしむるとは實  
 に孝も不孝も善も惡も玉石混交分別も無く見わけもなき天道は眞に目くら盲人に  
 こそあれと衆人は評判せしなりと然るに此問題に對し之が判断に充べきは彼孟  
 軻氏の一語でヌ其語に云「天將に大任を此人に降さんとするや必先づ其心志を苦  
 ませ其筋骨を勞せ其體膚を餓し其身を空乏し行其爲る所に拂亂し心を動し性を忍  
 ひ其能はざる所を増益する所以なり」とあり此語や天が將に此人に大なる擔任を  
 降さんとするや必先づ其人を艱難困苦に陥らしめ其心志を苦ませ其骸の筋骨を辛  
 勞させ其體膚を飢かつらさせ其身を空乏からしめて其爲る方向は一々拂亂とは何

とせん情なやと途方にくれしめ骨もさけ身もひじけるまで心を碎せ爰に則ち性を  
 忍ひ堪忍辛抱の力を練り鍛はしめ其能はざる材識度量を増益する所以であるとの  
 趣旨でヌ

是を推て察するよもかく善行此上なき大舜のかゝる不孝に遇れし一通り見た所  
 では天道は是非善惡サツパリ見わけぬ實に盲目で實に阿房でトツト相手にならぬ  
 様ダが實は此舜の不孝が是却つて天道の果して是にして果して能く理非善惡を辨  
 へたる所であるされば舜や世にも慘酷なる不幸に遇たる如くであるも實は此上無  
 く結好なる幸福をあたへられたる譯であるさては天道や譬叟の非道と母の奸邪を  
 金槌とし象の佞惡と生業の困苦とを金砧とし以て舜の耐忍材識志操を鍛ひ大聖至  
 徳の人材を製作せらるる所以なるが明らかか察せらるるトモアル

猶顧みるに此堯舜の世は九年大洪水の跡にて支那大改革をほどこさるゝの折から  
 生々の人にてはヤツカ此改革を決行し將來千万世にわたつて億兆人民の安堵の規  
 範を定むべきや實にかたき一なる故天が殊更に其非常の人物を作らんとて彼父か

たくなに母ひすかに象おでれりと云様に描ひにそろいと悪人を造りて舜の人物をかく大造に製作せられし一でソレ則ち支那今日まで四千餘年人民安居の制度教育の基を創立せしむる爲めの所由であるナント天人の人生を保護するの厚き注意の行届きたる能く思ふべき事です

嗚呼爰に世の少年よ世の學生よ學資金乏しきとてなげく一無かれ悔む一無れ目的が拂亂れ見込が間ちがふたとて失望する一無かれ挫くる一なかれ是則ち其心志を苦しめ其身を空乏からしめ行は其目的が拂亂失望落膽其耐忍辛抱の心力を鍛練せしむる神の深切なる注意でスされば神を折角是は物に成りそうぶと金質に上げてきたひかゝつて見ると僅に目的がはづれたとか金がたらぬとか云と直様モウつまらぬ破れかぶれと忽ちヤケを起し自暴自棄となり一層の腐れと酒に耽けり女にはまり或は詐偽竊盜と心を狂はし或は短慮にせまり徒死し或は落膽に病にかゝるなと折角金じきよ上げ鍛ひにかゝり給ふにもかく生氣なき類は止を得ずかのいはゆる傾むく者は覆がへすと間引にあてらるゝでス警むべき一である

以上の有さまより推すに兎に角運命と云者は必竟する所神が此人生を運轉し人を夫々の器械に遣はせらるゝに其見込のある人物はドシ〜立身出世させ器械にはめらるゝ夫がそろ〜驕がさし怠放出して器械にはまりかぬるは彼間引にあてらるゝ織田信長の淺井朝倉と鼎杭し上方地方を平定さるゝ當り杉谷の善住坊は百間阻て、柳の一葉をはづさぬと云鳥銃の名人夫が佛法の怨敵と一生懸命睨みすました矢玉がはづれて信長の陣羽織を射かすり其身に恙無かりしとか夫が天の間引きと棄る時に到ては本能寺まで明智が兵の爲にもろくそ一命果されし一である今でも投機の賣買なとでさうヤラ日和がむつかしい是では麥は総腐り爰買時々と奮發一番約條きめ手を拍た其翌日から明光々たる天氣となりアツケニ取られ明た口が塞がらぬと云様の事は毎度多い一是がいはゆる天運と云者でセウそれだから平生眞直に勉強して天の心に叶ふ様するより他は無いと云者です

第六 神徳「日本は特別神の愛する國なる」

支那人及歐人の日本論「程赤城の咄

さて斯く演題を換へて講を進むるも實は天道と云も運命と云も神徳と云もいはゞ皆一ツ事で兎に角天神の世界養育の御懐ろの中を過去今生未來とまひ廻つてる吾人なるにも何が一其恩養にものゝ事有うぞされば北畠准後の元々集に云く「昔者渾沌未だ分れず唯元氣有り云云其中に精有り之を神と云能く萬物に祖宗として兩儀を主掌る」とあるが兩儀とは日月の二なるが實は此渾沌中に鎮ります造化の天神と云は日月どころか世界中有りである幾万億の星をもソツと懐にさせらるゝと云大變な神徳で此地球などは手の内の玉と云たいがまそつと細い物ぞ其玉の外面にまとり付て居るちり垢と有るが吾々人間である然して諸君考へて御覽假令は今澤庵づけの押石をたまく八重なんぼで釣上げて其下に頭臚さし出すさへ随分いやな氣味がするのたが何と此地球はザツと直徑が一万里も有り夫から七曜星日輪などは地球より百三十万倍も太いと云洪大無邊な物を此大空に釣下げ吾々のあたまの上をまゝ廻て居る否地球などは吾々も其上で親重代くらして居ると云者夫が芋繩一筋かくるでも無く唯引力と云神の御魂の力を開闢以來百千万年今日に至り

位置を定め一點の違乱無く運動し夏冬夜日を成して四海同胞に賜はる其徳の無量なる實に筆にも論にも盡しがたき所である

但し以上の話は今日では小學校の兒童でも知てるのでよく云にも及ばぬが唯日本人夫ほどの恩を知るか知らぬか恩報の處か丸で神は無き物とする位だから爲方は無いが一体日本は古來神國とも云れた丈で餘所の國より神恩が一倍深いのだんは日耳曼人儉夫爾の論も日本は殊更神の偏愛に恩寵せる國デヤと云て居るが相違は無い所で一体宿泊を取るにしても下等の木賃宿は宿料ことに安く薪代位ですむが其代りほろ夜具などで夜通し虱に責明さるゝと云者處を上等宿にとまれば夜具諸器械賄に至り上等揃ひ其代りまた宿料も上等を拂はねばならぬと云者此理から推すと日本の如きは實に地球上無比の國體風俗氣候をうへて上等と云べき國なるにも其宿泊料と云べき日本人民が國家に報ひ神祇に奉對するの道は飽まで厚からねばならぬ道理である然るを今日神を龜末にする風俗の流行と來るとは實に國土に對して天罰が恐ろしくも慚愧千万の事である



我圓融天皇の永觀二年一僧あり支那にわたり日本の職員錄年代記各々一卷を宋の太宗に獻せしに太宗親しく召し見て大臣に云て曰く其世祚はるかに遠く傳へ其臣下亦皆世繼き襲て絶えず蓋し古の道なり中國支那云ふ梁周五代など曆を享る一尤も促き實に歎すべきなり」といはれしとぞまた清人の書と海國聞見錄に「祿の厚き以て廉を養ふに足る故に法を犯すこと少なし男女眉目肌理諸蕃の能く比擬する所にあらず實に東方精華の氣の萃る所なり」と云ひまた羸環志略に云元世祖雄心誇肆まゝに忽ち強て日本を臣妾にせんと欲す招き諭せども従かはす威すに兵力を以てす端無く十萬之師を擧げて之を海外に坑つ云云是より倭人遂に中國を輕ずる心有り明一代寇掠め蹂躪完たき宇無きに至る朝鮮亦ほとんご蠶食にあふ皆元人之が禍の始を爲すに由る」以上總て漢文之を譯すと云て縮み恐れて居るコト也ス

また西洋人の古く我日本を稱美したるのは建治と云年の比勿擲發亞國のマルキエスボリユス世にマロコホロとも云ふが支那に渡り元の世祖の顧問として日本の風土を記せし者と上に記せし元錄の比渡りしケンプルが記を譯せし鎖國論等にも専ら日本の美風

豊饒を記し又永錄天正の比期督教布擴の爲渡來せし佛人シアングラセ氏の詞にも「婦人衣服の華美なる日本に及ぶ者他に有るコなし其絹の糸の細かにして良美なるや衣服を十襲二十襲にせし者常に多く有るなり是日本絹の精良薄緻なる容易く敷疋の絹を懷中に收めらるゝを知らざる者は此言を信せざるべし」と云ひまた其風土氣候の良好を賞して「若し住民の健康を以て一國の空氣の清良を徵み知るべしとせば日本は地球上第一等と云ふ決して過たる賞には非ず其國病痾常にすくなく火々長壽を保つが故なり夏の時氣候炎熱なりと云へども周圍に滄海あると數條の大河國中に流るゝが故に自から冷涼を調和す土地膏腴にして一歲兩度米と麥との收穫あり是山岳雪を降すコ多く灌溉を助くるに因る者なりと記して居るである良齋閑話云最前長崎に毎度渡り來りし唐人程赤城と云へるが年若きより貿易の爲渡海せしも齡六十に近き程兩三年來らざりし故知己の人々などさては老年に及び數百里の海を踰へての商業はもはや止にせしならんと噂なし居るに二三年過ぎ亦々渡り來りし故長崎人も不審に思ひ或人其所由を尋ねしに程氏はいと氣の毒な

るさまにて禿たる頭を搔撫ながら其下候御話申すも丹顔にて飲食の慾に引れ  
 てと恥かしく候得共生年若きより日本に久しく渡り通ひ此地の食物を喰なれてよ  
 り何分にも吾自國の食物が喰れぬ様相成じかは何れも歸國の折には少々あて持歸り  
 て年中日本の食物にて過せしよ近年歳老ては妻や子孫を最早波濤の上を通ひて  
 の商業は止めて老後を安くを切り諫むる故渡海を止むもさて日本の食物喰つ  
 くしてからは頻に欲しくさすがに取寄せんも如何ぞ繼に外國に果なは果よと全く  
 口腹の慾の爲に又々渡り來りたり日本の食物第一酒の勝れたる次に味噌と云者吾  
 邦には無しまた香の物など風味吾邦の物は倒底及はずと談りしと云て云て云  
 また承應年中我國に歸化し黃壁宗の開山隱元禪師の談話に自分は生來病身にて身  
 體よわく本國に居りし時は日々獨參湯とて人參を煎して常に用ひ補なひし日本に  
 渡りてより毎朝味噌汁を食用し來りしに身體中々健かになりもはや獨參湯も何れ  
 サツハリ入らぬに成たと云て居られしと云て云て云て云て云て云て云て云て云  
 唐虞以來人民の糧食には稷を以て第一とする故五穀の受持を后稷といふて云て云  
 其

また稻米は味ひ悪く藁を役にし立す俵に造るも出来ぬ夫故米は布袋に入るの  
 を彼韓信が蘘砂脊水の陣も日本なれば土俵を投込む所を砂を米袋に入たので今  
 では印度各地歐刺巴の伊多利など米の出来る國もあれは澤山にもあらず味も劣る  
 て先年尾張國の船頭長吉と云が吹流されて露國のカムサツカに滞留し歸國の際  
 彼國の人が定めて留守中に羊や牛が殖て久しぶりに味はふで有うと云たを長吉聞  
 て牛羊は有るけれど大抵食せず平生稻米を食用するてと云たら此世界に日々米  
 の飯を喰ふ國が有うぞ虚云ふにも程があると笑ひしと云て云て云て云て云て云

以上吾國の國風醇く産物の美はしき食物の味すぐれたるなど産れて此かた喰なれ  
 て居れば何とも氣付かず其筈の様思て居れど神世より水穗の國とも裡安の國とも  
 云來るも必ず其ことわりあるてせう今や萬國交通ひらけたるにも彼是の風土産  
 物の良あし詳らかに知らるゝにも吾産物などの性質を吟味し神恩國恩の大なる忘  
 却してはならぬてである

かく文明の開け來るに付て器械の發明製作法の整ふてよりは土質の良悪物性のと

やかくなどは第二の様なれとさうでも土地の肥を厚く産物の澤山なるには勝たれぬでスソハ彼維新の當時に皆の考按では何でも歐米各國が入船り日本一國に取かへつて交易と云うに成たら夫こそ日本は金銀悉く吸上げられ見る間貧血症の骨と皮になり自滅して仕まふダロウと心配して居た所がソコは有難ひには土地は肥てる産物は潤澤と云物ですから交易始つて製作工業器械の開けるが否や山からる野からも産物が湧出し來り見るまに輸入を壓倒する勢ひとなつたでス勿論征清前後の如き輸入の裂しき時は別物たか其折合て居た明治廿年度の農商務省の報告に由て御話しすると其年の輸出金額の一番太いのが蠶の糸類で生糸が一千九百貳拾八万圓餘夫に熨斗糸屑糸絹ハシケナ合せて貳千貳百四拾九萬七千圓餘で有たさて輸出金額の順序は第二番が茶夫から石炭。米。陶器。生銅。樟腦。錫。マツナ。熟銅。漆器と云様な物で總計輸出物代價金額五千貳百四拾万圓餘にして輸入價額が四千四百參拾万圓餘で有て差引き輸出價額の超過たのが全く八百拾萬圓餘で有ましたマア斯云割引なので有て初め金銀吸上げられて自滅すると思つたのは間違つて

却て彼の金銀を吸上る様成たのも全く以上種々産物の御蔭ですされは國土の肥饒に産物の潤澤なのは實に有難い物でアルさて謂ゆる神の偏愛し給ふと云のは是等を云ので万葉集に磯城嶋の日本の國は皇神の愛しき國とあるは爰のことでせう日本人たる者は平生忘却せぬ様有たきでス

### 第七 幽政之上「幽政の根軸」崇神宇多鳥羽の三帝冥助の話

#### 唐の裴度の事

爰に演題を幽政と掲ぐるのは神のまつり事として神が此吾人人間の上の死生存亡興敗を御政事なさるゝ有さまを伸る心算でスが夫こそまた洪大無邊一朝一夕の話の能盡す所で無いから其委細は追て本教精義。心神理密察と云に述る心算故其に譲るとして爰には其主要な事を舉て例の簡單に述るでアル

そも幽事の始の理りをたづぬれば此天地世界の始め人間社會の組織其基軸を定め給ふの時天神則ち天照大神は天上太陽にまして日光照臨の限りを治めませ須佐之男大神は滄溟大地球を退立つ限り治めませと詔り定めませける是天神宇宙人生の

根軸を立させられし始でアルされは此須佐之男神より此世の人類は次第に廣まりける故此亞細亞大陸で此神を稱して人皇氏と稱ふるに朝鮮にては檀君と、なへまた日秀子尊とも稱る由にて彼怡土の縣主五十跡手が詞に朝鮮の蔚山に降りましと有るは此神にぞ有ぬべしさて須佐之男神は此地球を治めます功業を御子大國主大神に譲り傳へましける夫よりして大國主神自から此地球上の事を掌握に自由給ふと成たるで是より大國主神幾千年の間此東西洋の地を主宰させらるゝ事有ら然るに世の開明に隨がひ顯世と幽世と分るべき時節到來せしより瓊々杵尊降臨に及び天神詔命して大國主神に「汝の所始たる顯露事は是吾孫治めませし汝は則ち神事を治むべしと命せ給ひき」於是大國主神御報へまして天神の勅教如此懇懃なり致命に従はざらんや吾所治る顯露事は皇孫治たまふべし吾は退きて幽事を治めんと宣給ひし此御言によりて幽政の本おのづから定りて地球の上萬の事ども悉々に主宰し給ふ事となりしなり

されば此大國主大神と太后宗像多伎理姬神と御子事代主神と此世界の萬般興るも廢るゝも盛なるも衰ふるも生るも死ぬるも一々知しめす事で彼豐大閻を大雨にて援けまじゝも彼大舜を鍛ひ鍊しめまじしたも皆此大神等の幽政に出る事である此大神等彼土にては大昊伏羲氏其后女媧氏と現はれ或ひは東王父西王母ととなふるも此夫妻の神等にませりしと先哲も云へる事です

さて此大神等の現世の事ども御心のまゝ政りてち給ふ其一ツ二ツを伸れば日本紀に崇神天皇の御代の七年國の内疫病大にはやり死する者多くまた洪水暴雨五穀を損なひて百姓の難澁大方ならざりしとて天皇固より民を憐み給ふ御心深き御方なる故深く歎き神よ祈りまじゝけるに夢の中に神あらはれて我は大物主神大國主神亦の御名なり天皇を愁ひまじゝ天の下の治まらず民の惱めるのは我御心なり吾孫大田々根子をして吾前を祀らしめ給はゞ則ち立所に天の下平らぎ海外の國々自から歸ひ伏なむと告給ひしかば故早馬を四方よ走らせ大田々根子てふ人を求め給ひしに茅沼縣にして之を求め得たりしかは天皇召見て具さに素姓を問はせ給ひしに則ち是大國主神の正しき五代の孫なる由答へ申ししかば天皇大きに喜ばせ給ひ其祭主と

し重く祭らしめ給ひしかば天の下大に治まり五穀豊かに百姓饒はふ事大方ならさ  
 りしとそされば此天皇を肇國知する天皇と稱申しと云うであら  
 また宇多天皇いまた皇太子に立たまはざりし以前十一月下旬の比鷹を使ひ加茂の  
 社の邊に遊び給ひしにけ高き狀の老翁あらはれたまひ吾は此邊よはべる翁ともな  
 り春は祭り多く侍るに冬はいとさみしく徒然なり祭り給はれかしと有しに天皇其  
 時自然にコハ加茂の明神の仰せらるゝよと御心に覺ゆさせ給ひしが答へ申し給ふ  
 やう自己が力には及び申し候はず朝廷に申させ給ふべきにこそと宣ひしに力に及  
 ばせ給ひぬべきに有ればこそ申すなり甚く輕々なる所行なさせ給ふを既に近くな  
 りはべると宣ふやいなや搔消すやうにうせ給ひぬと有るが夫より間も無く御位に  
 即せ給ひしかば告させ給ひしまゝ加茂の臨時の祭り始めさせ給ひ其御告の有る日  
 十一月の酉の日なりし故其日を用るさせ給ふとぞ此事大鏡扶桑略記以下に見ゆて  
 あればいとたしかなる事と見ゆるでまた台記に鳥羽院天皇の御談話を記したる  
 に云「朕孕に在るの時贈后鳥羽院の御母藤原  
 茨子實季の女子也の母男子を生んを賀茂の明神に祈ら

る夢の中に衣の袖に居て言語を通はす後の御母の夢の中に明神形を現はし衣の  
 袖の上にして言葉を通し給ふ也他日又夢に  
 告げたまふに男を生ますべきならは間木に在るの物を取りますべしと夢驚て間木を探ま  
 せば銀の龍を得たり其傳へて朕が許に在り又夢中明神の居給ひたる衣を以て御體  
 とし社を作る即ち坊門の亭に在り朕今に御供を進つる」とあり此事は續古事談に  
 も見ゆて又確實でスさて加茂の大神は即ち事代主の大神にまして此神等は上にも  
 云通り此世を自由にさせらるゝ神々にもあり且つ皇室の專要たる守護神にましま  
 す故かく毎度自由に御容を現さるゝと見ゆるでス  
 さて以上は今の世から考へると奇怪の話ですが古書中彼是に掲ぐる所故かく爰に  
 擧る事です猶幽政の施さるゝ所とれもふのが漢籍には彼春秋左氏傳を始め搜神記。  
 博物誌。述異記。酉陽雜俎。日記故事の類擧るに耐ざる所今其二二事件を擧げて  
 幽政の其摸様を知らしめんとするにせよ  
 そは唐の裴度が話です其事蹟は唐書本傳日記故事等に見ゆたる所ですが裴度若り  
 し時相者に吾骨相を相せしめしに相者のくく見て眉をひそめ誠氣の毒なるが

どこまでも薄命フシヤクの人相なり學問しても上達トクむつかし官途クワントに就ても立身リツシンは出来ない  
 で有ろう是固より母の胎内タイナイより生付られた者謂ゆる前世ゼンセイの宿業シュクゴフとあきらむるより  
 外は無いのザヤと云たて裴度は力をおとし夫より學問萬般打すて、自暴自棄ジボウジキで過  
 し折マから或時思はずも一人の老儒ラウニウに出あひ何くれ談話タンワのはし彼老儒云はるゝは貴  
 氏は往さき有る身なり定めて現今ゼンキン勉強ケンケン晝夜シヤおこたられぬ丁チヤウなるべしと云しに裴度  
 答へて其丁チヤウに候ふとて相者の云し次第シヤウをかたり斯云事儀シキから學問も何も打すて、  
 居ますると云に彼老儒は呵々カカと打笑ウチウタひソシナ愚妄ウツウツを按慮アツルなら不幸フツク福は其はづたと  
 云に裴度は聞とがめ阿房アハなかんがへとは何が阿房アハを所ショで有るのか夫々フフが聞たう  
 エザルと云へは彼儒者ニウシャ容子ヨウシを正ただし貴氏キシも幼年ヨウネンから必ず四書位シショウイはよむで居らるべし  
 彼孟子ベイツウに「天テンの作る禍ワひは猶なほさく可べし」と有るでは無いか今貴氏キシの云はるゝ其母  
 の胎内タイナイより産付けられたと云骨相ボツサウ是天テンの作せる禍ワなるべし然らば避ひべしと云には  
 非ひずや至誠シツゼンの信心シンシンを以て仁義ニギをつくし人を恤アハみ徳トクをほどこさは必ず天地テンチの感應カンオウを  
 受くべし是禍ワをさくる道ミチです然るを人相ニンサウか悪いとてのさうても除とぬ様にすぐ様自

暴自棄ボウジキに安んずるのが是眞マコトの阿房アハと云者ですと示しせとて固カタより敏慧ミンケイなる裴度思は  
 ず横手ヨコテをハタと拍ヒち嗚呼ウ天テンの助くる所か先生の教誡ケウケイに枯かたる骨ほねに肉にくを附つする者か  
 吾身ミミは此阿房アハの闇黒アンクワクに落入らくにてうかお瀬無せなかりしに今や月の光ヒカリを得るが如しと夫よ  
 り精神コンシツを入れかへ信心シンシンの誠マコトをれとて日夜ニツ勉強ケンケン學事ガクをはけみ天地テンチの感應カンオウを祈いのりしで  
 ス

かくて裴度或日香山寺シヤンサンジと云に遊あそび本堂ホンドウに休やすらひて在あるに若わかき女一人堂ドウに入り本尊ホンソン  
 を伏ふせをがみて出行しゅつぎ跡あとに一ツの服紗フクサづゝみを遺失いしつ往いを裴度ヘイタクは見て跡追あとかけし  
 も往いへを知らざりしが此まへになしれなきなば人やひろひ往いん必ずたづねて立たかへ  
 るべしと本堂ホンドウの奥おくに入いて待まち居ゐるに案あんの如ごとかか女メはずたく、走はりにかかけ來きり本  
 堂ホンドウを見まはしドウと身を地ちに打付うちて泣伏なみす裴度ヘイタクは立出たち出でモシヤ物モノをおとしたるに  
 は無なきやと云へば女メはわづかに顔かほふり上げはふり落おる涙なみだをはらひ聞きて給たまはれ吾父ミヤ  
 なる者或人の横よこしまなる色々の無實ムジツの云いひかけに今いましも獄舍ゴクシャにこめられたり親一  
 人に子ひとりこの身助ミタケくる道みちも無なきにやと天地テンチに祈いのり効きありて或人の情ナガレにて玉帶タマオビ

犀帶といふ二ツの寶を惠まれて之を其筋よ賂ひなば若くや無實を云ひらく術と申  
ならむかといはれし詞に喜ひいさみ急く道筋此本尊ををがみしよ心の周章るまゝ  
取遣せしとは情なや是が無ければ父の命もモウ是ぎりよくく天地に捨られし此  
身の上かと思はずツツと泣叫ぶに其遺しは是ならずやと裴度は目の前にさる出  
せば女は之を見るよりも天に拜ふ地に拜ふいかなるお方が親子が命助かる御恩せ  
めて二品の一ツなりと、差出すをイヤ其段の事にあらず一刻も早く持歸つてと云  
に女も氣のせくまゝ三拜九拜立去ると云てス

此より後歲月たち裴度或時かの先年人相を見てもらひと相者に逢ふに相者見るよ  
り頸を堅横よひねり御身は何ぞや人相を見て進せし御方と思ふがハテ不測以前の  
悪相に打てかはつた大福相定めてかくかはるは必ず理由あるべきなり斯道研究の  
一助に致したし始終の御話をと云まゝ裴度つぶさに物語りしに相者切りに感信し  
古より云天高きに在れども卑きに聞くと天の其慈善の心に感するはかくも速かな  
る者よやと歎せしと云てスさて後に裴度學識智徳大に進み唐の憲宗皇帝に仕へ

同平章事執政の大臣に昇進し淮西の吳元濟を平らけ晉國公に封せらる爾後穆宗敬  
宗文宗に事へ四朝の功臣として其名外國まで聞け福祿全たく長壽を得て相果しと  
云てス

漢の董仲舒の春秋繁露に云一人始生有大命是其體也有變命存其間者其政也  
と云へり此語を推して考ふるに人始て生るゝ時に既に胎内より賦付られたる者は  
謂ゆる大命と云者で有て先天的に定まつたるて之を運命の其本體とするでス然  
して其人の生涯の内に爲る所善徳あり悪行あり是に因て其本體の運命變りて禍ひ  
をなす福ひをなすのを之を變命と云て是其善惡を賞罰する政と云者との譯をす  
右に出す裴度の一代の如きが天の賞罰の政の著る者と云者でセウ

第八 幽政之下「幽政の負債差引の話」王祐幸福貸借の返済を促す

市女傳吉天祐を交換する話

一條兼良公の眞誥に云人天地ノ氣中ニ生ル動作喘息皆天地ニ應ズ善ヲ爲シ惡ヲ爲  
ス天皆之ヲ鑒ム暗昧ト云テ勿レ神我形ヲ見ル少語ト謂フテ勿レ鬼吾聲ヲ聞ク人陽

善ヲ爲セハ人身之ヲ報ス人陰善ヲ爲セバ鬼神之ヲ報ス人陽惡ヲ爲セバ人自ラ之ヲ  
 治ム人陰惡ヲ爲セハ鬼神之ヲ治ム」と有り此語を味はふに人間は是れ天地空氣の  
 中よつゝまれて生て有るので此空氣は則ち神明の空氣で有るされは動作所行喘息  
 吹く息皆天地神明に應へて其知る所となる故に善を爲し惡を爲す天皆之を鑒がみ  
 察せずと云丁無いでアル暗昧ダと云て犯せば神は見透して能我所行を見る少語と  
 云て妄りにさゞやけは鬼は一々吾聲を聞かるゝでス人陽に善徳を行なへば人間社  
 界に於て其報ひの賞美をなむ人目に見ぬ陰の善行あれば鬼神之に福を報ふるで  
 ある人陽に惡事を爲せば人間社會にて之が罪を治め人目に見ぬ陰の惡事をすれ  
 ば鬼神之が罪を治めて其罰を行なはるゝなりと云へるので有ル  
 一 体斯云有さまで幽冥から此人間社會の事情を見させらるゝのは丁度燈火の明り  
 のさゝぬ暗き方に居て明りの方を見る様を物で人間からはサツパリ何も見ぬない  
 が彼方よりはドンナ木蔭で爲たゝも暗昧で爲たゝも皆一々明白に見ぬすいて居る  
 と云者でス然して老子の語として云へる物に總て「善人の福ひを報ひ惡人に禍ひ

を報ふるの徴たる之を一人の上に試見れば或は差う様見ゆるが之を天下一般平均  
 した上から試し見れば更にたがひは無い者である之を唯一時の上にて驗見れば或  
 は違ふゝも有るが之を百代の上にて驗見れば未ダ嘗て違ひは無い者で有る」と云  
 意味に云て有るが實に此通りな者でス

また同く老子の語として「天之道は其猶弓を張るが如きか高き者は之を抑へ下き  
 者は之を擧げ餘り有る者は之を損ト足らざる者は之を補なふ」と有るのダが今其  
 事實の昔より世に顯れ來る者を擧るに假令はかの武内大臣は六代の帝王に大臣と  
 して内能襲外三韓を平らけ其他の内乱よ忠義を盡し神に信心を凝されしかば生涯  
 に天の報ひ給ふ所猶足らすして其子孫平群氏蘇我氏紀氏佐々木部氏を繁昌此上  
 無りしも蘇我の馬子入鹿驕奢の餘り無道を行ひしより天遂に高きを抑へて衰滅を  
 取らしめられき又中臣氏は見屋根命種子命以來政ごとを執るの家なりしも漸々衰  
 へしを天下きをあげて鎌足不比等に至て大に繁榮し兼家道長に及んで榮華極まり  
 しに天其餘りあるを惡みて稍々衰微に及びしでス平家は貞盛正盛朝敵を平らけ源



氏に抗して皇室を衛りしかば天清盛重盛を擧て家門を赫かしきその清盛榮耀に誇るに及び天満るを缺きて自滅を取らしめし源氏は頼義義家奥羽の豪族が跋扈を諒して朝廷其報ふる所足らざりしを天之を補なふて頼朝尊氏に至て大に其繁榮を興はられしも其餘りあるに及んで皆之を損して其廢亡を促されしとてアルさて以上の道理を推し更に其談話の針路を轉じ此社會物理の上には及ばず先づ比較を取るべき者は水で有る諸君かの水を見られよ浸々として流れ行く水は地の汚きに逢ひ或は穴あるに出あふか暫くとくまりて汚きにたへ穴に満ちて然してまた浸々として他に進むなり必竟水は地上にたへ平均するを目的とす是水の性と云者でアル水の性は獨り水に止まるにあらず人生の萬事万端も亦皆平均なりソハ社會の組織も平均なり政事も平均なり法律も平均なりたとへば甲なる者が乙なる者の金錢所有を或は借りて返さす或は詐はり取或は盗み或はこの名譽を損害する類皆甲が乙の權利を缺き損じ其平均を失はせたる者なりソユで法律は借たる者は返さしめ又詐偽取財竊盜或は名譽の毀損等は金錢所有は償はしめ猶罪の餘りたる

者は相當或は入獄或は懲役甲をして其困苦を受けしめ其恥辱を取らしめて兼て乙が取りし損害困苦恥辱と相方平均せしめて社會の權利を全くするの道理ですされは其根本目的平均の道にあらざるを無きとてス

政事と云もまた同じく社會の萬般に就き相方關係の平均を満足せしむるを以て目的とするは固よりのトてヌたとへば一國の農工商が政府の保護を受け御蔭で生業を營み枕を高くして安堵を取る故其保護の賃錢として租税を収むると云は云までも無い社會の平均をなす理由でアルさて此社會平均の道理を目安として世の中の總てを割渡すと云と幽政の負債を負ふ者いな竊盜をはたらく者が實に續々ですそは官員なり教員なり諸會社其他に雇はれた者にせよ其取る所の給料は皆其身體を苦勞し社會に幾分の利益を與ふるに因て受る所で有ル然るを其實際を淨玻璃で照して見ると月貳百圓取ると云顔が其材力學術から社會に與ふる利益に至り百五拾圓か或は百圓程しか出來ないと云のが澤山有る夫が人間仲間では長官や課長の電信の都合とか情實が有るとか程能く誤覺化し通すも幽政の實算にかくると云と則

ち月々五拾圓なり百圓なり負債を負ふのチヤ否竊盜をはたらくのダされば早晚に  
 決算の時機が来るのチヤはた判決の期限が定まるでス  
 然して此幽政の統計表は獨月給取にばかり計算を擬べきに非るは勿論固より社會  
 一統洩なかるべきでされば人間が生れ付ての福祿財産是また幽政から割出すと  
 粗月給と同様の道理なので其財産相當の義務をしないのは矢張負債を負ふ道理  
 でアル生れながら榮耀に飽きて已れは華族た門閥ダ紳商ダ豪農ダと大きな面して  
 金錢湯水の様に使ふのは當りまへダその筈ダと云様な人間は固より現在に子孫  
 の財産を喰糜すのみで無く目に見ぬ幸福をも喰滅すと云物でスすべて現在の財  
 産も幽政の幸福も全く同割合で譬へば先祖が尅苦して百萬圓額の幸福を積たる時  
 に子孫がまた其上に儉約尅苦して幸福を増加すれば繁昌限り無き理屈たか當りま  
 へ一年壹萬圓額の幸福を喰滅すとすれば其家は百年しか續かない道理と云者でス  
 されば老後の安樂をれもひ子孫の繁昌を願はん者は成丈有る所の幸福を食ひ延べ  
 新たに幸福を貯蓄するの道を心がくべきでアル

さて以上の幽政の計算の世に施さるゝ者猶其事實のたしかに見るべき者を彼是に  
 たづぬると先ツ彼諸君御案内の文章軌範にのせたる蘇東坡の三槐堂の記を論題と  
 して御話すると東坡先ツ天道の事を色々論べて申包書が語を引て云く人衆き時は  
 天に勝つ天定まつて人に勝つ」と一体世の中の天を論する者が皆其天が彌よ定ま  
 つて決算するの曉を待すして議論するから天は實に茫々た當にならぬとソコで善  
 人もナンボ喞々云て善をしても天はサツハリ盲目たとソコで漸々怠ける様になり  
 悪人は機を得てソレ見ロ天が賞罰などしてたまる者が愚直な奴は詰責上げて酒の  
 一杯デモ飲たが徳たと云様な調子で腹一杯の悪事をするると云者されば大盗人の盜  
 跖が命長き孔子や顔淵の災厄にあふたのは皆また天の定まらざる者た松や栢の木  
 の始て山林に生ずる時には艸から生長まけ牛馬にふみ付られ鹿や兎に其芽をほつ  
 られ倒底雲を凌ぐ大木などとは思ひも寄らぬ有状是天の定まらざる時ダ夫が彌よ  
 困難に耐て生長するに及び四時を貫ぬき翠を改ためざるの清操を千歳に保つに至  
 る是天定まるの故でアルと論下窮めてアル

猶論を次で善惡之報至<sub>レ</sub>于子孫則其定也久矣吾以<sub>レ</sub>所見所<sub>レ</sub>聞考<sub>レ</sub>之其可<sub>レ</sub>必也審  
 矣」と論<sub>レ</sub>てさて云く故の兵部侍郎晉國王公案に王祐として宋の世の始の人ありは五代の時漢及び周の  
 朝廷に仕へ其名大に顯れし後に宋の國起るに及び太祖帝また二代太宗帝の朝に事  
 へて其材識文武の道を兼ね其行義忠孝を純らにせられしよぞ天下の人皆其相國大  
 臣たらん事を望まざるは無しし然るに餘りに正直に過ぎて媚<sub>レ</sub>び阿<sub>レ</sub>ねらざる故世に  
 厭はれつひに昇進を得ず天の報を受ず終りしです  
 嘗て聞く此晉公王祐手づから槐の木三本を庭に植ゑられて吾國家に勞苦を盡して報を得ず吾子孫必  
 ず三公と爲る者有んと云遺れし已にして果して其子魏國文正公王旦に至り大に用  
 られ眞宗皇帝に大臣として景德祥符号年の間朝廷清く明らかに天下無事太平なる  
 時に在りて其福祿榮華を享る<sub>レ</sub>十有八年なりしなり」とさて上の槐は懷の音ありて  
 ナツクル心にて大臣は遠きをナツクルとて三公の兆とする<sub>レ</sub>にて三公をば三槐と  
 も稱する<sub>レ</sub>でス

東坡猶其後に述て云く今夫物を人に寓けて明日にきて之を取返すに直ちに之を得

る<sub>レ</sub>有り否らざる<sub>レ</sub>あり而るに晉公王祐忠孝の徳を其身に修めたる(猶幸福を貯蓄し之を天に貸し預くるが如し)其返報を天に責めて(槐の木を植ゑて子孫の幸福を待つもの)必ず其返報を數十年の後に相違無く受け取るべしと約條を結ぶ  
 もの左契を取かはし手を交へて相付し渡すが如し吾是を以て天の果して必ず抵當  
 にすべきを知ると論せられたり

また其末に左の意味の事を演べて有る随分吾々輩耳のいたき所宜しく之を警めざるべけんや其語に云く嗚呼晉國公其身眞忠を盡して子孫に幸福を遺す吾ともがら小人に於ては朝の所爲夕の覺悟に及ばずほとんど夜食の米の用意さへなさず唯霄越の金をつかはざるを誇る唯時を相て利を射る常に懷手して千金を攫み濡手で粟を掬み鳥餅で馬さゝん事を欲すぬれ手の粟は水に流れ安く鳥餅でさした馬はいつまでも鳥餅で繋ぎとひる事を得ず博奕場て取た金はまた博奕場で逃くとマア云様の意を伸べたり吾人胸に手を置き工夫すべきとでどにかく散かぬる金は骨を痛め爪に火とほした金に有る<sub>レ</sub>でス是天神の能くかんがみ能く察して其苦勞にむくひ

志を感得らるゝ故でアル  
 以上さまざまと説去り説來り幽政の狀況を伸たが餘り長いは欠のたね最早演題を  
 改るとし今一ツ稚いかたの耳にはいり安い話を致す事に爲マセウ最前堀秀成翁と  
 云が講録の内にコン十一條の事實が有テソハ夙う寛政享和と云年の比江戸小綱丁  
 に住居せし豆腐商人に佐兵衛と云のが有テ生れ付て至て正直に柔善質で有テるが  
 家内は女房と兒女二人内には豆腐の賣子の六七人も使ひて先ツ不自由なき生活で  
 有マシタ所が薄命の門に入テ始としてその妻が不斗した病氣で冥途の旅におもひ  
 きしよぞ跡にのこりし兄弟の娘姉のお市が七才で妹のおとめ三才と云で佐兵衛も  
 さし當途方にくれしが本より慈愛に深き性質とてつくづくかむがへ斯成ては後妻  
 にても迎へざれば家の振まはしもむつかしいが世の中で繼母と云者は何ほやさし  
 い質でもまゝおや根性は脱れぬならひさては二人の稚いのがいかなる憂目か見る  
 べきぞ繼吾身が不自由こらへさへ爲ればすむと云もの後妻無しを辛抱すべしと父  
 おやの手塩に二人の子供兎や角育てゐて加へての不仕合に佐兵衛眼病をわ

づらひ付次第に重り往々に今は商業も何も打やめてほとんど居喰の有さまと  
 成たるトモス

かくて月日に關守なく十餘年の春秋うつり文化元年といふ年には姉お市が廿歳妹  
 おとめ十六歳佐兵衛が眼病はいよく重く全く目くらのけうがひに生計は必至と  
 往つまつたで或日姉のお市は妹にむかひ父上の眼病是まで長の年月薬用療治物を  
 入れ手をつくせと何のさるしも見ゆはこそ昨日評判のよい下谷池のはたの眼課醫  
 に見せたるに今では全く内翳の症と成たれば中々一通りで治りがたし藥價療治代  
 とも金參拾兩前金ならでは受持がたしとの申分夫についても彼是を思ひまはせば  
 母上のア、ならせられぬ其後も常よりやさしい父上の吾々がまゝ母に出あはんの  
 が不便などて其身の不自由厭はせられぬ親心せめてもの恩報よあの眼病一日な  
 りとも月日の見せたさ去りとして參拾兩の金はおろか彼所やこの買がり米代薪  
 代打かさなり跡へも先へも往れぬ切迫かれ是思ひせまつては海より深く山より高  
 き其恩の万分の一をも報ひたささらばと云て女の身の外に爲方もあらはこそ此身

を吉原の廓に沈めてと思ひ切て居りますぞや夫も付ても是からは父上の杖はしら頼となさるは其方のみドウツ念入れやさうしてと跡云さあて泣伏におどめは聞より耐りかね思はずワット立つ聲を袂を噛む聲ふるはじエヘドウ爲マセウ不束に年さへとらぬ此身がマア跡にのこつて何とセウ一日とても往ればせぬ其廓とやらに身を賣るには一ツでも年の若いを望むとか其身を賣るのを私にかへドウぞや内に残つて下され是非にと歎く其殊勝さお市もさすが跡の事氣がへりなればソシナラ其様して貰ふかと遂に兄弟相談きはめ知る人頼みてたどめをは年季定めて五十兩にてうき川竹に身をしづめたるトでシタ

是ぞこれ文化元年三月十二日の事であつたとかれた市は彼五十兩吉原より受取吾家をさして歸る途中池の端に來かゝりしに日も夕暮に四五疋の大吼かゝるにさすがは女アレーと走り出じヤット一貳丁してホットト息懷中を探ればユハいかにかの五十兩懷に無いのヂヤヤア南無三寶ねといたかと走りのどつて見たれども往來ゆじけき道すぢにどうして有う様も無うた市は爰に天をあはぎて胸を打ちエエと

うせうぞあの金は孝行一圖な妹が其身を賣すて天に地にもかへ難きたつた獨の父上の藥の代にと云金を途中で遺てしまふたとはドノ面さけて妹に云はリヤウと云分けして内に歸ろうモウ是ぎりの命ぞやソレアノ大川橋より身を投てと走り往きつゝ欄干によち昇りてはそなたの空サソ父上はナセ遅いかモウ歸るかどソレアマア明日の日よりは目がひさへ見ぬ御身に誰がサア喰せてのまするトなるか父上までも殺す身か去りとてどうして生て居らリヤウと既にかうよと見ゆる刹那後口よりシツカリとらぬ一人の若人れ市は狂ひて情よははなして死なせてと云をは無理に引れろし人無き方へぞ連行せと

さて若人は脊打さすり一体どう云譯故でかう死うとまでの事議斯なる我も縁と云者身に及ぶ丁ならば随分盡力もと深切な一言にた市はうれしく始終を語れば若人は涙ながらに聞ねわり夫はマア聞ても憐な始終の話幸ひ今夜と云今夜私もふところに此金員も縁でか有マセウ失敬ながら今の急場是にてと五十兩取出して手に渡せばた市は夢か現かとあなたはマア如何なるれ方にて見ず知らずの私にサア大

枚の此金員御名許を何とぞ有マスと云に若人はイヤ名許も何も入る丁では有マセ  
 ヌ夫よりは一刻も早く御父に安心をさせなされと云すて、多くの往來に立まされ  
 とお市は跡を追かけて夫でもマアと呼たれと其儘失てしまつたです  
 抑此仁をひかなる人と尋ねると是石町二丁目紺屋傳右衛門の伴傳吉なる者で去年  
 思はずも藍玉の仕入に賦が能くて百五十兩の利益ありしを百兩は銀主にあづけ込  
 み残り五十兩を懐ろに今夜深川に遊びにゆく道筋此れ市が切はくを場へ出あひ  
 此あはれなる事情には思はず惻隱の心はこり幸ひふところにてせし金子をは遊びを  
 やめて斯は一命を救ひし丁でアル

斯て是より三年の年月立ゆきて文化三年八月十五日と云に相成たるでス今日は深  
 川八幡宮の建かへ落成し正遷宮の當日とて四方よりの叅詣は雲の如く潮の如く  
 で寄せ來るのは實に大變な群衆を有たと云丁でス時にかの石町の紺屋の傳吉も其  
 日近邊の朋等八人同行で叅詣と出かけしに何がさて大造な人出と云者で道の程は  
 人で埋まり丸で人間の酢桶見た様で所跡の奴は先の奴の肩を押さへワイワイ

イ〜と押ゆくと云者ではまつたが最後迎も吾思ふた方さへ往くなどは出來ない  
 人のお蔭で八幡宮の門前へ頂上押付られ連で行るゝと云塩梅式でかの傳吉も小綱  
 丁あたりへ往た比は八人の友たち皆はぐれワイワイ〜で頂上傳吉も或家の  
 門口へ押付られてまつたでス

所でホット息突き馬鹿々々し丸で押較と傳吉は門口よ立て居ると内より若い  
 奇麗な女が出來りジツと顔見合せエ、貴方は往の年のと云さま袖よすがつて一生  
 懸命引はるので傳吉喫驚マアトシダ貴女さん人違でセウと云へ中々聞入れず  
 頂上庭に引はり込み家尊往年のれ方でスと叫びながら親子で座敷へ引上げたで傳  
 吉は稍々思出しオ、道理で見た様たソレでは先年大川橋で既の所アノ時の御方で  
 スかと云にお市は三拜九拜マア本トサお蔭さんで今日まで此世の月日を拜んで居  
 ります其時お名許は云て下さらずソレでも一度は御逢申さぬ丁有るべきせめて其  
 万分の一の御禮なりと、明ても暮ても寐ても起ても夫はつかりは露忘れず神々か  
 けて願たおかけ今日と云今日是も神の引合せかマア緩くりと何も無いけれど親

子が取持つに傳吉はイヤ私は同行がたは勢かうしては居られぬ何れ又と云のをソレでもマア御待下されと引止め先ッ茶を一ツソレ御菓子と云のぞとやかく時間を費やし話して居たでアル

かゝる折から突然表の方人波打ての大騒ぎサア大變ダ〜と一時に叫き立るで大變とは何事を火事か喧嘩かと皆々門口に立出れば是を近代の年代記に獨筆せられ噂に高き文化三年八月十五日深川八幡叢詣群衆の爲永代橋の半三間許落たと云の大騒ぎ其死人三千六百餘人に及び其翌日まで舟奉行向井將監八十艘の舟を以溺死の死骸を揚げしと云次第なりとされれば彼傳吉が同行せし八人の友等は一人も残らず土左衛門と成れて其翌日各々死骸を荷はれて家に歸りしと云其中に唯一人傳吉のみお市に引留られたばかりで命助かつたと云者で近所地方大評判でソリヤ實に不測善行者と孝行人と好一對夫が互に深切を以て助け合たとはさうでも出雲の神の結び給ひし者に相違は無いかゝる因縁も珍らければ夫婦として後世の紀念に遺すべしと云者で近所知己媒妁してお市を傳吉に嫁おめ夫婦となす小網丁はた

留を呼かへして家をつがしめ一家繁昌して居たと云うてス

右の如く幽政の施す所や此傳吉お市が二條の如きの双方の陰善陰徳を差ひき計算するの隨分的實は明々白々たるがあるにすされは世に處する人は宜しく此天の鑒みる所の明々白々なるを察し常に吾身の所行の如何なるを顧み平生をつとむへき一て是吾身の幸福子孫の後榮を取るの道でス

時に或は問曰貴子の説話以上聞く所余輩の思想と實に正反對でス抑も今日輿論の方針とする所既に我國も彼先進國たる英國等と同盟並馳するに至ては彼是までの未開幼稚なる迷信思想を追拂ひて成たけ世界的老成しき見識を立べきは勿論なるを以上の如き子ども欺誣の御幣荷的極まる説を持出し折角日本も汗水を流して僅に今日の開明進歩を致したるを一朝打破しつるとは實に困つた話ならずや一体神に依頼する者は軍するも商法するも御祈禱とか禁厭とか御水とか斷食とか痴愚くささ〜はかり頂上夜食の飯まで神さんが焚て枕元にさし付て下さる様を依頼心をおこし其上天罰の神罰の臆病風でおどしつくるから少年兒童に活潑の精神

を失はせ風が吹ても雷が鳴ても神罰とか何とか頂上神經病の頑固となり自滅してしまふと云者されは足下の説たる我國を衰弱せしむる者に非ずして何ぞ其説を聞かん

答て曰貴氏の所問たる余一々之を胸にたへ詳かに味はふにまた全く足下の論と生の所見とは正反對なりさて所問の大端たる第一英國と同盟し世界的に進むに於いて未開風の脱せざるべからざるに第二折角進歩したる開明を退歩せしむると云ふ第三神を信する者の依頼心甚しき第四神罰説の臆病を誘ふ第五日本を衰弱せしむると云ふ則ち順序を以て之を辨するに第一問や抑も神は造りたる本にして人は造られたる末なり然れば其本に報ふは人生の大義なり世界の真理なりさては英國と同盟しても并ひ馳ても世界的をやるにしても大義は彌よ務むべく真理は益々勵むべし大義眞理を棄るは野蠻なり日本が野蠻をやつたら英國は同盟を眞平御免と謝絶すべし且つ敬神は固より未開に非ず故に除にも脱するにも及ばぬぞ

第二は折角汗水を流して進歩せしめた開明を打破するとか退歩せしむるとかだが其開明は足下の論によるに全く敬神と反對の開明なり然らば是野蠻的の開明なり野蠻的開明は我輩眞平御免と謝絶する所されは其退歩は我輩一大白を擧げて祝せざるべからざる第三は神を信する者は依頼心甚しく果報を寝てまつと云風で大に自奮の氣を挫くとの論の様だが夫は大間違既に前に云た通り神は吾輩にかの両手両足五本の指を賦命下さつたるから軍するにも商法するにも吾輩あくまで手足指を活動せしめ心思を苦しめ自から助け自ら務め神の助けと協力一致ならしむる道理で又また病氣などにして既にして神さんが醫術や藥を授けて下さるから醫藥の功を盡した上で神助を頼むので色々の弊害は固より誠る所です

第四は神罰説で臆病たらしむるをさそひ出すとの心配なるが一体日本では古來我國家に盡すに臆病心を懐けば神罰をかうむると云を方向とするので是大和魂の大本で又たから神罰を恐れて返して勇氣百倍すると云者でアルソハ神功皇后の三韓征伐元弘の蒙古退治などが夫です然して神は正直の頭に宿ると云より正直に道を守



る以上踏きつて事をなす夫で往んのは先天的宿業とあきらむると云者で英斷勇決武勇凛々たるので第五は神に依頼する者は不活潑柔弱迷信より神経病となり士氣ふるはず衰弱するとの論なるも夫はた大間違ソハ神功皇后の如き女性の御身として神の教のまゝ英斷勇決見ず知らずの外國に打渡り唯一戦に打隨へ而も勇決を以て文明の學藝美術を移しまたるにも日本の開明富強は續々開けたるで決して衰弱なき取越苦勞は無用デス

第九 「社會」國家社會の起り「大木荷ギの話」并に不品行の傳染

二頭鳥の比喩及び家内の不熟

同ト事を繰かへすのは随分退屈な物でアルされば幽政のトは先づ此位にして是より神が此人間の社會といふ者を組たてしめて生活に満足を與へたまふ趣旨を話よ及ふで有ろう抑も人間生活を満足するに就て其肝要なのは社會の組立で有る社會とは人間仲間にて生活の組合會社を立たるを云うでスが先づ爰に社會の斯く名付る理より其形況効能施用法と段々説き及ぼすに一体此社會なる者は鳥獸仲間

には更になく人間ばかりに在るで其有る所以をいかにと云に抑も人間には食料の穀物作る田地も入用なれば衣類の料の綿桑作る島も入用なり薪や材木の立つ山林も入用と云者では依て此土地が人間には大切の者となる則ち大切なるよりして山川を堺ひ區域をなす城や池を築き大勢が會社を組で土地を守り田圃を保護するトである是が則ち國と云物でかう云因縁から國家社會といふが組立られたでアルさて大勢申合せて持ねばならぬ物故社會と名付たのゼアル

又社會と云字の由で出る所を問ふに禮記の祭義の扁の疏に「社は五土の神能萬物を生ずる者と云白虎通には「土を封して社を立つ」と云史記の註には「貳十五家を里とす各々社を立つ書社とは其社の人名を各々籍に書する也」など見えて居る一休人間は土地に五穀麻桑材木が出来て衣食住を授かりたかゆで生活する故廿五家寄會て社を祭るで夫が則ち社會と云者の始りデス  
尙此理を推し演るに鳥獸で有れば天然の木の実草の實肉食を其まゝ夫なり見當り次第に食えて生活する故別に領分も田地も國も區域も全く入用無き理由にて則ち

國も區域も入用無き故亦社會と云者も入らず社會と名付る理由も無きことなり夫ダカラ人間に於ても是に似て天然の者を見當り次第無謝々々喰て生活を遂る彼熱帶暖國の土人と云風の人類をさして之を野蠻の民と稱へて鳥獸に近き下等人類とするコトでスされば人間仲間に於ても此社會と云者は少しでも精密堅固に立る程が上等の民種と云べき理由である

また社會と云者の形狀効能を演れば社會とは唯に蝦兒の集會や蚊の勢揃へと云様に何の思想も無く頭臚枚を衆めたのを云理由にあらず亦夕すゞみや縁日開帳に各々の思想で寄合た風のを云譯で無い其道理は縁日や開帳に參詣するのは二人でもよし三人でもよし一人にても事欠けず却て連にはぐるゝ氣づかひなくて安氣と云物抑も社會は夫と違つて五十人なり百人なり組合ふ譯で早く云へば持合商法組合工業の理屈なり決して一人や二人銘々勝手く々を所行で往く道理に非ず猶其理由を熟と形様すれば恰も數十人の人夫が力を合せて大木か大石を荷ひ運ぶが如き有様でス一体此大木は如何なる大力の朝夷でも辨慶でも一人では決して動かぬ所を

此大勞が力を合すればトシテ大木でも自由自在に動くソコが社會の効能である亦社會と名づくる主義である

さて右の大木を荷ふに其人數が五十人なれば五十人荷ひ上た以上誰も彼を精不精無く力を出さねばならぬ若し其内一人横着な仁が居て肩でも空す様の事が有ると忽ち其相棒の者は腰が屈み足かねぢれるさて一人が屈むと又其隣の者もへこむ夫から段々屈むと云と頂上揚句のはてには大木がすはり込で動かす爰に至て社會が諸潰れ總勢五十人の難儀となる例令は壹人の割合百斤持として五千斤の石を五十人で運ぶ時に若し一人肩を空すと忽ち百斤割合が其上に昇り又三人三人と段々不勉強の數がますと段々割合が太くなり終に百斤割合は百拾斤となり百貳拾斤となり究竟總へこみになり社會の瓦解となると云者でス

所で社會に於て勉強不勉強の不公平無き様規則を嚴密に申合せ設くるは尤も必要である一体此五十人の者は此大木を荷ひ付たる所で其賃錢を受取り一家の餬口に充るコトなるを到底大木が往先に往着ぬ時には全く五十人の餬口生活が立ぬ譯され

は一人の肩空しが漸く妨げとなつて五十人の社會の潰れと成ると云者一國一洲も亦是と同く人民中若し一人の不勉強肩空があると漸く傳染し終には一國の衰弱敗亡の災を取るべきは社會不品行を改良するの道は甚だ肝要の事也諸君試みに思へ上に云如く鳥獸には相持を爲る事とは牝牡欲を生じ交合のと兒を乳育して母子相親しむと此二ツの外持合ふ事は更に無き事也斯をもて禽獸では猛勢獅子鱷の如き強大象鯨の如き醜惡猛虎の如きあるも獅子虎が一國一山を押領して國王となつた例も無く鱷鯨が大將と成て軍艦禦いた話も聞かず大きな體や猛き勢ひで小さな人間を阿容く捕れて其自由に從がふと云者されば人の禽獸と異なる所以も主として此社會の効能に在る事で電線で大地球を張周らば鉄道で押塞ぎ輕氣球で虚空を翔まはるも皆是社會の盡力と工夫に出る事でス猶英の富強も米の文明も必竟此荷仲間の肩空さぬ勉強の纏たるのでアル然して右は大にしては一國一洲小にしては一町一村一家内皆社會の相捧仲間太いが細心同く組織やはれ彼肩空の風が行はるゝと忽ち一村の衰耗一家内の左り舞の

となる又社會中品行の良悪も全く肩空と同く傳染の速かなる害同し理由である一通り云へば遊蕩に耽るも藝娼妓に樂むも吾金で吾暇つぶして吾遊ぶ丈の事自主自由更に他に關係無き様なれどソコが社會の荷き仲間必竟害の及ぶ所彼肩空に異なる事無く所謂上の好む所下必ず甚しき習ひで昔吳王が劍術を好んだで其下人民各々割木でも振上る風と成生創が絶なかつた楚王が腰の細い女を可愛かつたで其下女が飯を減じ飢死た者が多かつたと云咄の通上流も立つ長官殿が柳橋に權妻するた騒に等外吏も月給を仲居にでもほり込む氣になり碁が流行と云へば其下井目風鈴で稽古を始め能が好きと云へば其下謠でも謳て見ると云様の者々則ち一町一村でも其通り少年頭が村躍りでも始ると村中擧て對の浴衣でも着て見ねば交際に間が悪いと云様の風となる去は上流人の不品行は火事の火元の如く流行病の發病者の如くで其延燒傳染の速かなる事越歴の走るが如く必竟是社會の目當荷き仲間の棒頭と云者で棒頭が深田に轉ひ込た大怪我は皆一統に相伴さする事故何とか上流人の不品行は其罪普通に幾等を加へ堅く取締りたき事である

さて終りに臨んで社會の弊害今一ツ云たきは吾々社會の一家の内に行はる、肩空の傳染を醫話で演るに昔天竺の博物館とかに頭を右と左に二ツ持てる鳥が居たと云話所が其右のは至ての勉強家で油断なく餌食を拾つて居る其又左の首は氣風が全く似ず大の遊墮者年中ふら下つて虫一疋拾ひはせず始終厄介でくらゐ其癖右の首が何か甘美そうな物拾つて居ると横合からナヤツと取て喰のヂヤ所右の首犬に不平しサテく横着な奴たハ居喰して居る癖に横取まで爲居るは見て居口酷目に逢してやるはと則ち一疋の毒虫をくはへ態と旨そうに打振て居ると案の如く左の首がナヤツと取て喰たヂヤ喰たは好つたがサア大變毒虫で腹がせき出した情ない、腹は一所で右の首も今さら大後悔ア、痛い、耐へられない、コンナに一所に腹が痛と早く知たらアンナ意地悪い、は爲なかつた者をと泣叫て居たと云話がある

世間随分何くの内にも親子兄弟一ツ家内とも氣が付ずコンナ意地わるい風な、が毎度多以先づ一番に妹が此内の姉さんは年中遊んで自分ばかり楽しんで生業などはサツパリ爲ない夫ダカラ私が獨で勉強てもおつつかない、エ、我も晝寐でもするはと早即肱枕でやりかくる所で又姉がゴック、口小言ソレ亦妹めが晝寐た性の無い人間ダヨシ、彼がやるナラ吾黨もやるハと頂上家内寢息の共進會然してコンナ風で行く内はどうでの結果米櫃の底が隙に至り飢るき目にあふ時に及び腹がせき出しメラ一時ソコになつて何はア、痛い耐へられないと泣いても叫ても追つかないそれダカラ一國でも一村でも一家内でも平生能く家内は同体同腹ヂヤと云所に氣を付け決してはたぐにならぬ様同心協力親子夫婦兄弟申合せてはたらく様有たい、でス

#### 第十 教育 我帝國教法の二條「更紗形教育」韓文公と寐恍先生の話

今回はすでに第十次教育なる題を掲げて演話する、でスが教育にしても日本には否萬國何くと云ても天神の詔命を基軸とせざるを無き、でソハ謂ゆる吾人の三界は天神字育懷胞裡を徂徊するとして天神の字育させらる、懷胞の裡を徂徊する者なるに於とも角にも世間萬般の、神の養、外ならざれば教育も法律も政事も悉

皆其資とし神命を根本として之を演ぶべきは勿論の事である況んやまた近く教育の勅語にも正しく斯道は是皇祖皇宗の遺訓と詔せられし事なれば教育の基軸や皇祖の詔命に在るは云までもなき事である

抑も我國帝室に於て教學の道を起し設け示し給ひし所以の者たる粗二條に出たるが如し其一條は延喜式祝詞の卷鎮火祭の祭文の中に「皇孫命に天の下寄し奉りし時事寄し奉りし天都詞の大詞事乎以皇白入」と有る是皇孫瓊々杵尊に此天の下を寄託し奉り天位に即しめ奉りし時に寄せ授けまじ、皇祖の詔命の言と云へるなり然して此詔命の言の主義たる祭典の要領は天地の最効造化の制を定め給ひしを則とし行ふべき所以と人生萬般の規則は神人の始生せし摸様に習ふべき理由を示し授け給ふなり然して之を祭典の祝詞中に置き給ひしは全國衆民に普ねく往渡らしめんが爲と察せらるゝ事です此箇條は歷世朝廷の記録に傳へて保存し則古語拾遺に別卷に在りと記せしが延喜中式典編集の時記載せられしなり是古傳中第一等の者ぞアル

今一條のは天地萬物の始めて生ぜし状態は人生の存亡興敗の軌範とし學ぶべき者とし天祖是を神孫氏々の人に詔勅して口傳保存せしめ后来大嘗の時天皇の御前アノヒに奏上する事なりし則ち主としては天日鷲命の裔孫の家に承け傳へ世々其奏上の職ウケツクに仕へ奉りし之を天語氏といひ又語部と稱へし姓氏錄左京神別に見ゆ其傳へを保存せし様は古語拾遺云如く世々親より子に口から口に傳へしと云さて大嘗會の時に奏上せし事は延喜大嘗會式に「伴宿禰一人佐伯宿禰一人各語部十五人青摺の衣を着す東ヒコ西掖門自入り位に就て古詞を奏す」と見ゆ一体此大嘗會の式は中臣の奏詞瓊々杵尊の天祖より日嗣の皇位を始めて傳へ授かりまじ、時の様をさながら學び習ふことにし有れば此古詞を語るのは則ち天祖の本教を示し教へ給ひし様を學び習ふ者に見ゆたり之を以ても我國の教學の根本は萬物始生の状態に在る事知るべきである然して皇祖の遺訓神人始生の眞象たる本教は斯恩勅に舉行れて有しは外教の繁昌以來遂に以て此教衰微に至りてアル

一体我古への道は天地最初天神の幽在の象が全く中を執るの形で有たは上に記す

通りで夫を殊さら云立て教とすると云々せにあらぬも知らずの間に中を執るの道が行はれたるハ伊弉諾尊橘の小門の檉原で身滌給ふの時に「上津瀬は瀬早し下津瀬は瀬よはしと詔給ひて初めて中津瀬に降かづきて」とある是が全く中和を取るの道で物に見たるの始であるされは古事記の文では「初於中瀬」と殊更に初てと云言を置れし者必らず意の在る事なるべし則ち此時初めて中を執り給ひてより陰陽中和と禍津日神と直日神と並び現はれ天照大神と素盞鳥尊と出顯はれまし爰に天地社會の大根本確立したるトデアル

また藤原鎌足の從弟意美麿を舊に復し中臣氏を稱せしめ給ふ宣に「高天原初而皇神之御中皇御孫之御中執持ヲ伊賀志杵不傾本末中良布留人稱之中臣」と有るものは是唯神と君との御中執持つと云のみにあらず謂ゆる祭政の上で中和を執らるる臣との儀と考へらるるさなくは本末傾けずと云と中良布留と云語が何の由とも聞はぬトとなるをや爰を以て見るに我上代言舉せぬ中にも自然々々一方に傾かず偏らぬ中和の道國家の方針施行上に行れて二千年の久しき世界無比の國の繁榮幸福

を全ふせよ物と思はるゝ也ス

其事跡の世々に見ゆる來りしを舉て云へは神功皇后外邦を征と給ひしに武内の宿禰曠世の識量を懷いて内外の政務の本に干預りて其方針とせらるる所専ら外邦の良美を取りて改革を進め之に由て日本の文明を促したりき然して其到底裔孫蘇我の馬子に至り麻戸の太子と心を協せ支那印度の道を入るゝを方略とせしにも饒速日命の裔孫物部の守屋見屋根命の裔孫中臣の勝海之に反對して主として保守の道を取れり蘇我氏亡ひて天智帝大に改革を舉給ひしには専ら支那隋唐の制度を移して我質樸の風を潤色と給へるにも其御子弘文天皇も日本にて始めて詩作を爲し給ふまで漢土の學に通じ給ひし其次天武天皇は頗るまた我固有の風をおこし古事記を勅語して其選述の基をなす或は祭典の古式を興隆とて國體保存の政術を切に舉行し給ひしトモス是皆偏よらぬ様中和を取らしむ由也ス

また大寶の令は周の周禮唐令六典等より要と取し者なれど其間神祇令公式令などには固有の國風を掲げたり爾後格式の編輯に及びて更に堂々と天降よりの古格古

式を一ツも漏さず掲記して大に典故の保存を務められたぞアルされは文章など由  
我國人は大抵漢文体ならでは事を記すこと能はさりしを業平貫之順なき世に出ら  
れてより言文一致の倭文体大に盛なりし事と見ゆてアル

以上の話柄は誠固るべき話で諸君退屈有たろう是より話の舵の向をかへ今日  
實地の教育の上の「或は家庭の教育に就て談論するに一体教育と云者は人間が神  
明より授かつた本性持前を十分發育て其目的に往つかじめ満足に達せしむる譯で  
す彼中庸「能其性を盡せば則ち能人の性を盡す能く人の性をつくせば則ち能物  
の性を盡す」と云てアルソコデ此人の本性則ち吾人の本分持まへと云物は誠に面  
白の者で丁度鐘や鼓でも打つ様な物で能く打てばよく鳴る軽く打てば軽く鳴る強  
く打てば強くなる悪く打てば丸で鳴らぬと云割合に極つて居るソシテ吾人の腕に  
は十分其鼓に持まへをつくす丈鳴らぬの本性を具へて居るがから教へたり學  
びたりすれば其本性に往つかる「でスされは教育學問は十分吾人や鼓の具へ居  
る丈の本性本分を盡さしむるを目的とするでス

さて能く其性をつくせば則ちよく人の性を盡すと云へば先生が十分先生たる  
の本性持まへをつくして授業をすると弟子もまたおかけで能く記憶よく進んで  
其本分を盡して卒業が出来甲から相當仁義厚誼の進物をつとむると乙からも又相  
當の仁義をつくして返禮を務むると云者またよく人の性をつくせば能く物の性を盡  
すとは上手な馬乗が十分馬乗る術の本分持まへをつくすと云と馬もまた十分馬の  
持まへ本性を盡してさながら一ツ鉢の様に自由自在に動くでス大工が又十分上手  
に腕を鍛ひ其持前本性をつくして鋸や鉋をつかふと云と鋸や鉋もまた十分其本性  
持まへの性を盡して切る、と云者である是が所謂物の性を盡すと云ものぞス  
其中で人間はいはゆる世界の邸主役地球上の支配人と云者だから一種特別に理性  
と云て誠に道理の満足した本性を神より賦命つて夫を以て世界の萬物を満足に活  
動せ満足に物の物たる本分持まへを盡さしむると云者でスモシ人が居なかつた  
ら世界はくら闇馬が居ても人が居ねば田鋤く「モならず物輸ぶ「もならぬ鐘大鼓  
が有ても人が居ねば面白い音を鳴らす「も出来ない鋸や鉋が有ても人が居なかつ

たら鋸鉋はさび腐るのみで何の役にも立たぬ則ち人が理性を盡して指圖支配を爲  
 るから世間の百物各々其本分持まへを盡し爰に於て人生の最も大きに最も眞正な  
 る快樂いはゆる夢を見ながら百里に走る流車も出來寐ころびながら千里に咄する  
 電信も出來文明平治の世が開け此上無き快樂が受らるゝでス教育の目的此満足  
 眞正な幸福を受るの方便を講究し學ぶのが其眞主義と云者である  
 教育に麓に出迎ひする様のが有るでス怠惰勝に記憶力薄き生徒は其學課の高く峻  
 しきに到底其峯に昇るゝ能はず爰に教訓情實有て其麓に出迎ひ卒業證を渡す此生  
 徒は遂に其峰に往つかず峯を見ずして見た体を爲し誤覺化し往でアルまた更砂木  
 綿に摺形したる如き教育あり摺方の染摸様を本方染込たる物にあらず僅に上面に  
 色を摺たるのである此人未だ其地位に至らざるも種々の情實を以て遂に學士の位  
 置をふむ嘗て避暑中の講習會に其講師を依頼せらる則ち或博士に請ひ講録に叮嚀  
 に書入を頼み是さへ有れば大願成就と其會に臨む忽ち夕立降來り椽端なるかの講  
 録を濡して浚る許になりぬインヤ散で眞赤になり書入亦見るべからず學士大に狼

狽俄然に病氣發せりとて車をとばせて逃歸りしと云でス斯の如き更砂形の學士  
 は退色やすきゝ此通りのゝなり當世仕入學者甚だ多し大抵學級證を鼻にかけ急速  
 月給を取揚つて入學中の費額を埋るに扱々たり嗚呼世の學生更砂形と成らざる様  
 常に注意を要すべきでアル

熟々世上の人間を見渡すよ悉く目は二ツ手は二本未だ八ツ手の觀音然たる者有る  
 を聞かず然らば是均しく同等の人類なり之に等級を附するや果して如何唯學問し  
 て智と徳とを増長するの外道無きでス然るに此目は横に鼻は豎なる我仲間中其  
 間歳入幾百万兩なる人物あり僅に三度の飯喰うや喰すと云吾輩の如きあり斯の如  
 き雲泥の等差を生ずる若し是智と愚とに因て生ずといはゞ吾輩は是下の下の愚の  
 愚歟豈氣の毒のゝならずや斯云へは幾んど一錢の價直無きもまた世の中は是謂ゆ  
 る好々なり家百万金を累ぬるも小使錢がソウ一時に入る者よあらず盜難の用心す  
 る丈の厄介なり食前に方丈珍味岡の如きも腹が太ればモウ夫ぎり侍妾數百人もお  
 かけで虚症を煩らふ原是まけ惜みのへらず口かは知らねど好々と云者は必ず幾分



有る者でス

其好々に付て學文に一種乙な風味の有るのを御話すれば彼文章軌範を見るに干襄陽は是襄陽の大都督左僕射燕國公と云者たから何でも我國の今日に引當ても陸軍の大將公爵の大臣と云價直は屹とある人物です所が韓文公は其時兵子帶の一書生下宿の二階で煮豆ホシリ喰や喰はずの吾輩人物たるは相違なき事なり然して其文名の赫耀として我日本までも及ぶに至りて干襄陽は僅に其中着として韓退之の文に従ひ來りお蔭で我輩に名を知られたと云者です當時では干襄陽は鯛などは猶口に足らぬと云に韓文公は鯛が碌に口に入らぬ程なるも今日四大家八大家の第一として東洋文章中興の祖と云たら大傑い者で干襄陽など唯一筆の狀貫たばかりで名譽のお相伴をして居るのた韓退之の千歳の今日に日本の犬打童も知らざる無きに至れるは實に是學問の効能と云者です

今一ツ學事修業の人間に一種不測を價直を與へ愉快を取らむむる話をすれば最前江戸にて誰知らぬ者は無りし太田直次郎なる人が或年東海道を旅行し或旅亭に

泊せしに翌朝目を覺し頭を擧れば枕元に小奇麗な小屏風が立てある緞子の縁を取り滅金の金具など叮嚀に仕立竹に雀の戯るゝ繪が至極とほらとく出來て居るに太田素より好僻の道として早即一首浮んだまゝ矢立取出しベタベタと贊をしたるに少時すると宿の亭主敷居に手をつきお早う御目覺です今日は日和で御道中も御仕合なと挨拶し不圖彼屏風に目を付け喫驚し失敬ながら此屏風の贊は且那遊はまたかト云に太田はハツと氣付ハイ無差と似た丁を致したはと所で亭主は目を丸く血相をかへ定めて御名人トか何トか御覺は有る下では有マセウが一言の御沙汰も無く御染筆とは驚人な次第とやり出したで太田も今更後悔御尤も千万重と龜忽の仕方申解べき様も無しと過まるに亭主は彌と圖に乗り一体此屏風は或當時の名畫に頼み仕立彼是相應物も入て居ますに何程の御秀逸かは知らぬと斯く御隨意に墨黒の御筆頂戴とは實に困り入た次第是デハ以來座敷にも出されず全く反故デスと張込むに太田愈よ迷惑し一と道理至極實に言語同斷の不都合此上は相當の張換へ料でも差出すと狂て御了簡と手を摺ての陳謝に亭主は小言ブツブツ勝手へ下て茶

でも飲で居たで有ル

折から近所で常に江戸通ひしナト風雅めかした男入来るに亭主は見懸てかう見給へ随分世には滅方界を客もあれば有るもの兼て拙の秘藏の枕屏風は何やら金釘押まけた様な樂書をして居るは無法にも程が有る詰責あけて張かへ料でも出させてやるはと彼屏風を差出せば男はつくづく其贅を見るに「雀殿お宿はどこか知らねどもナヨツナヨと御座れ笹の相手に「蜀山人」と有るを見てナニ此贅故した、か詰責張かへをさすると云のナ亭主は答へて「マアさうする舎ダハと云を聞て男はイヤ途方も無い此繪に此贅實に價千金則ち是が蜀山人四方の赤良先生一号寐恍先生「日本の寐恍唐マア目ヲ覺」と唐人も手を措た先生ダハ斯く都合よく贅とは願ても出来はしないはト云の亭主は亦喫愕イヤセニあの客人が蜀山人知らぬ事と思ふ存分はりとむたは氣の毒千万な何としたり好らう佳肴は無いが早く用意をソレ菓子でもと騒ぎ出し頂上金壹兩封物にし恭しく臺のせ座敷のこなたに平蜘蛛の如く少さくなり先刻はかゝる御方様とも知らず重々粗忽千万申解くべき様なき次第

と恐れ入は太田は驚きイヤ何と有ル唯今の口上は全く拙が申しそうな挨拶だと云れて亭主は彌よ縮みこみ左様仰せあれば誠に地にも入たき心底と云に太田は可笑さいヤ拙の姓名が知れて前の「を御了間下さるトカ然は何もユンナ心配には及ばナイと打笑て立たと云トでス

嗚呼諸君試みに考へ見られよ蜀山人の筆の先とて吾の筆の先とて黒の墨は黒い更に違ひは無い然るに吾とが若し斯る「を爲たが最後無差とした樂書他人の所有物を毀損したトカ何トカ要償金何拾何錢おまけに大きなお目玉頂戴は遁れぬ所然るを蜀山人の贅とは云へ人の秘藏の屏風に無差と樂書し其代りに向ふから金壹兩よ酒肴で低頭平身の謝辞を受るとは實に民法にも刑法にも例文の無い一種希代の事と云ざるを得ず抑も此相阻は何より出ると云に全く身に修行の仕込を爲たとせねどに在ると云者一体學んだ藝と云者は駄賃もかゝらず持荷にもならず往た先では五圓なり拾圓なり金になり道中の路費にも小使錢にも盜賊の世話も取遣す心配も無く實に無形の財産と云者でス腹よ蓄へた者として丸焼の火事にも出し忘れた

咄もなく命からくらの洪水にも流た例なき重寶がラシキもグイヤモンドも及ぶ所に非る者ですどうか世間の少年諸君若い内に此貴重なる寶を精一杯攫取せられよ是こそ清風光月と一般誰が何程取るも勝手次第なれば遠慮無く取らるべし是此身生涯の福德快樂の基です

問て曰以上教育の話随分面白く演られソコは略感心メカ吾輩の聞く所に依るに一体教育の眞理たる凡そ人と云者は常に益々眞正の道理を纏ね進んで其極意に到らんと希望するの心あるは是自然の本性に出る者にして天の許せる自由なり然らば教育の事は飽まで其自由を與へ自然の本性を全ふせよむべき事なり然るを皇室の典故とか勅語とか之を教育の基軸として其範圍を脱せしめざるは自由を妨ぐる者に非ずして何ぞや説あらは請ふ之を詳細解示せられん事を

答て曰問はるゝ所の意一々了せり之を辨解するに自由制限の義を詳らかにせば他は自ら明かなるべし總躰自由は謂ゆる自由にして其制限と云は曾て無き物の様なるもとに非ず自ら制限有るなり唯其間人間の立たる制限あり天の立たる制限あり

人間の立たる制限にして天の立たる所と符合する者は是天地眞正の理に符合する者にて固より用ふべきなりさて其自由制限の理を近くたとへて示すに人の空氣の中に生息すると魚の水中に游泳すると其氣中と水中との限は十分自由を許すなり然れども人よして空氣を離れて外に出て自由せんとし魚にして水を離れて外に出て自由せんとするは之を許さざるなり是天の立たる自由の制限なればなりされば人生社會にしても所謂君臣父子夫婦兄弟朋友と云如き秩序は是天の立たる自由の制限にして何程自由を許すにしても此以上の秩序を破毀の自由を許さざるなり且つ之を破れば社會壞乱して生存し能はざるゝ猶人の空氣を離れ魚の水中を離るゝと同一轍にして速し遅し其平安を失なふコトアル

然して我皇室の典故とある惟神の道は謂ゆる天の立たる道にして天の立たる制限に符合する者されば此惟神の道にして細則を立は(人間の定むる所は見解の違ひ無き能はず)或は眞理に相違の事も有ん其大綱に至ては(是天地の眞正道理)之に隨がつて自由の制限を立て壓制するも更に道理に於て妨げなき者アル能く其理を玩味ふべきコトです且亞黎斯度德爾の

説にも教育は有機万物の天性をして普く其發育を(本分の所よ)完ふせしむるの意也  
 人は各々他の動植物とは一種特別なる理性を具へて居る也されば教育の主義  
 は(教師は其生徒の)此理性を啓發し以て人々(生徒)が天より稟たる知と徳とを併ひ進まじ  
 め最大の快樂を享得しむる方便なり」と説きまた無倫知利は「學問は永遠不滅の  
 人魂(世に生れ繼で來た)が常に天神の眞理を渴望し之を要求せんとして勉勵して得た  
 る果實なり」と説き又「學問の自由權は天神の設立する所なり」共云て居るにも  
 學問の基軸を天神に取るのと自由制限の天神に在るのは西洋古今の通説と思はる  
 べし

### 第十一 神社「郷村社保存の主義」町村制の勅語「氏神の起原及其恩徳」

段々題を累ね話柄を進めて既に此回に及んだが一体演話の間諸君の退屈を恐れて  
 種々な比喩話などでトツと話が掬み散じの様で御不満足の方も多いでセウ是亦  
 止むを得ない事情サテ猶演たきには山々でスガ都合有りて此題限り局を結ばんと  
 すされば結局に臨み全体的大旨また生の尤も希望にたへない事情を諸君に御依頼

旁演する中でス抑も惟神の大道は毎度國體精華にも云たる如く大は國家的小は個人的  
 社會の萬般何に向ても善つくし美盡したる至極の道でス中に就き皇國の民心を纏  
 めて忠勇愛國を誘ひ勵ますに於ては實に其柱石と成てる道でス其結好な大事を道  
 をば今や世界は戰國東洋は多事紛雜危機迫たる折からにトツと等閑に附ははとん  
 ど棄て問ざる有様に陥らしむるとは嗚呼機敏なる日本同胞やいかなる思想をやと  
 怪しまるゝ程のことでス

さて主として御依頼に及ぶのは全國郷村社の神職諸君或は神道教會諸君氏子總代  
 諸君でス諸君は神道に預つて常に人民に親接せらるゝにも斯道の擴張は其任に在  
 ると云者今や外人の雜居既に許されたる以上續々入込み來たる曉之に従つて各外  
 教は日に月に舶來し各々論説の矛鋒を揃へ鋏を集めて一同進撃目指敵は吾郷村社  
 氏神産土神でセウ其子細を抑も此郷村社と云は第一日本の生貫で我四千万同胞の  
 報本反始人生義務方向の根本と成て居るソユデハ彼等が跋扈を逞うし四千万同胞  
 の魂を傾んとするに至ては先づ第一の妨げとなるのが郷村社に相違無いでアルさ

れは彼等一生懸命攻撃をなすは固より必ず口を極めて誹謗し未開幼稚の妄談とか  
 文明の障害物とか偶像教とか多神教とか種々様々打毀て有マセウナント諸君よ氏  
 神産土神と云は吾輩日本人種が大切な大先祖では無か吾々此土に人と産れ其報本  
 最第一の主尊では無いか然るを打毀すまゝに打置て日本男子の本分が濟むか否日  
 本建國の大基礎が目茶苦茶になるはサテは生命を擲ても氏神保存の辨護を爲ねば  
 ならぬ抑も吾輩祖先以來水穂の美穀に飽き浦安の浦安くくらし飽まで神恩皇恩に  
 浴しながら今や東洋多難日本の安危に際し吾郷村社の大義も明さす袖手傍觀して  
 は國賊に近いと云者去はと云て外教者に對し滅法的な腕力沙汰に及ぶなどは言語  
 道斷野蠻の限交際上の葛藤にも及ぶ一故努々謹むべきで夫も我郷村社に云べき條  
 理の無くばこそソコは實に此上無き見事立派な條理の具はつたる我氏神産土神夫  
 を古來一人も碌に口墾明て明白する者が無かつた抑も神社は我日本人種が第一國  
 體の玉條と仰ぐ延喜式に「天祖天宗の詔命以て天津社國津社と鎮祭奉る皇神」と  
 記し其祭る所以は萬物は天に本づき人は祖に始まる郊の祭や大に本に報ひ始ふ反

るなり」と云の義で生とし生る人間として一人でも半人でも之を粗略にしては本  
 分の立ぬと云條理を具へて居るトデアル

然るを中古來間違つて仕まつて朝廷では最勝講たの維摩會たの國々には國分寺を  
 立て講師を置き國衙以下に講釋をして聞かするのヂヤ夫はどんなナカと云と全く  
 印度の黒奴の話柄ヂヤ夫に委ねて神主殿は安心をし緩くり御神酒で晝寢をして居  
 たので遂に神社は由緒も何も分らぬ厄介者となされ頂上雨もる小屋の卑屋に屈こ  
 まれたで有る能も焼すて流し捨られぬ丈であつた否大友宗麟などは其身清和源氏  
 神の御裔と有ながら大抵焼すて、仕まつた此後とても何時かゝるの出來ない  
 云保證はできぬ此理由たから吾輩は精限り根限り其條理を伸開き開關以來未ダ一  
 度も他人種に頭を下けず膝を屈めず獨立無比たる國体を顯はる其柱石たる氏神産  
 土神を寶祚と併て護衛し天壤無窮の皇室の御榮々と共に此大倭民族子孫の幸  
 福を固めたいです

さて氏神産土神は我日本同胞の永遠幸福の大機軸たる所以を演るに去る明治廿一

年四月十七日に公布相成たる市町村制に付ての勅語に隣保團結の舊慣を存重させらるゝと有るが誠に感泣に耐へられぬ大切な語でス其勅語は

「朕地方共同ノ利益ヲ發達セシメ衆庶臣民の幸福ヲ増進スルヲ欲シ隣保團結ノ舊慣ヲ存重シテ益々之ヲ擴張シ更ニ法律ヲ以テ都市及び町村ノ權義ヲ保護スル必要ヲ認メ茲ニ市制及び町村制ヲ裁可シテ之ヲ公布セシム

さて此勅語の御趣意を粗まじに演るに畏こくも天皇陛下は地方共同とある町村民各々の利益を發達しめ衆庶臣民の幸福を増し進めんことを欲めして村里隣保團り結の日本上世よりの舊き慣風俗を大切に保存嚴重にし益々之を擴張め更に取締るに法律を以てし都市町村の權利義務の損せられぬ様保護するの必要を御見認めになり爰に市町村制を御裁可有て之を全國に公布せしめ給ふとの御趣意である以上勅語の趣きより推釋し吾國の上代に溯はつて上に見ゆる隣保團結なる鄉村隣保團り結の其起原を尋ね詳しく伸るに上古に瓊々杵尊國土の大君と臨ませられ次で神武帝大和に帝都を奠らるゝに當り臣民とある出雲氏とか中臣氏とか或は大伴氏尾張

氏大和氏など各々神孫の人々が彼豐葦原の茫々たる土地を拓き地方々々に一族團り一村一郷と寄集り共同團結を開き始めたのである則ち最初夫婦の神より數人兄弟の子が出来其兄弟の子や孫と段々繁昌從弟裔と村内に家分れし次第に廣まり遂に一郷一村の團體を形づくつたて有る然るて其一族の本家末家長幼の秩序を正し一村一族親しみを厚ふするの根本として其最初の元祖夫婦を押し立て氏神と祭り團體の中央主尊と崇め祭たるが氏神の始で有ル

されは氏神とは則ち出雲氏の天穗日命中臣氏、天兒屋命尾張氏の天火明命大伴氏の天押日命紀氏の手置帆負命大和氏の神知津彦命の類にして皆夫々出雲氏の出雲尾張氏の尾張紀氏の紀伊大和氏の大和國など地方々々に其一族集まつて隣保團結をなして其國を開造し次で國造となり一族團體を纏め氏神産土神の祭祀を擔任し孝徳天皇の御代猶中世まで歴然として遺つて居たてス就中出雲國造紀伊國造など今の世まで連綿繼續せるは實に日本の名譽物で外邦に誇るべき者でス

猶此遺風が中世までも行はれ専ら氏素姓を糺し一族中の正統本家の人を推して氏

の長者として源氏藤氏橘氏など大姓は行はれ源氏は皇族に出る故王氏の高位の人を其長者に補し藤氏では攝政關白の人必ず長者に補する。此長者は唯に一族を取締るのみならず教育をも監督する。源氏では奨學院淳和院藤氏では勸學院橘氏では學館院と云學校を建て長者が其別當校長に補し専ら其子弟の勤學を誘ひ英才を育ひて氏族の後榮を計り。實に一族團結上此上なき美舉でアル。されば氏神の國家の爲武士道の爲其効益の大なりしかの源氏の石清水八幡宮藤原氏の春日神社平氏の平野神社など子の誕生したも元服するも軍陣に出立も昇進したも旅立つも悉皆氏神に告申し祈り申す。其信心至誠の厚かりと推て知らるゝ。でかく先祖を大切にするから隨て祖父祖母父母と其厚恩を探尋て自から大切にす。る習慣を生ずる。また臣民國家に盡す志操が奮起する其は大作家持の歌に「大伴の遠つ神祖の其名をは大來自主と負持て仕へし官海行は水漬屍山往かば草むす屍大皇の邊にこそ死なめ願みはせと」と言立て云云大伴と佐伯氏は先祖の立る言たて裔孫は祖先の名譽絶えず大君に奉仕ものと云繼る云云」と云るなど其祖先が大來米主

と名のり忠義盡せし職分夫に付て吾々海に戦ひ死すとも山に死すとも大君の御爲にこそ死なめ爰に誓ひの言立て祖先忠義の名譽を千万歳にも絶まいと云繼來る」と武びし者は大和魂の眞面目是あればこそ三韓も唯一討に討從がへ蒙古十萬の衆も微塵よま今また征清の連戰連勝も皆是氏神祖先の忠義を思ひやり克忠に克孝に億兆心を一ツにし溢れし愛國の致す所に非んやかゝる世界無比の良習慣たる氏神の由緒を演もせず擴めもせず藏めたくとは實に寶の持腐らと日本同胞の心底が分ぬと云者です。

次に産土神と云は氏神とは少さか事異なり先づウブとは舊事記に壬生部とある稚彦連皇子の生れ給ふを育て申す由の名なりされは御初生の由なり。スナは土地の由にて播磨風土紀よ本居をよめり紀にもし式かよめりの神名帳に尾張國葉栗郡宇夫須奈神社とありこそ塵添埃塵抄に庵入姫誕生の地なるより云とあり此等に依るは則ち各人の生れし土地の精靈の神の由でス。

然して産土神と祭る神靈に甲乙の二種あり甲なる一種は開闢の世神々が國土を開

造させらるゝに或は國を牽き沼澤を埋め開墾など勞きますに依り深く凝せし其精神永く其土に留まり靈德較著く土地人民を擁護ります類是でアル彼出雲風土記須佐郷の處に「神須佐遠命の此國は小國なれど國處に在と詔玉ひ云云已命の御魂を鎮め置給ひし所故須佐と云即正倉有り」と記しまた五十猛神筑紫國より始て木種を播植し給ひしに依て今筑紫郡筑紫村に筑紫神社と祭られ衝杵等乎留比古命素盞鳥和泉國を巡行し吾御形衰坐すと詔りし故に大鳥神と祭られましとあり是其大古の神の神靈を開造の地に留めまし者有ル

乙なる一種は土地の百物を生々活潑生長せしむる地氣精靈を云のでアル其地氣精靈とは産靈造化の神の精靈の地球全体萬物に充實て物に體して遺さざる生氣を云ててス其一例を擧げば延喜祝詞式の祈年月次等の祝詞に御縣神と有るは天皇の御膳部に用ひらるゝ野菜を守らるゝ神靈と聞々同く山口神とは御殿の修繕に用ひらるゝ材木を守らせらるゝ神靈と聞ゆるに其神の御名は何れも其土地の名や山の名にて高市の御縣神長谷の山口神など稱ふるゝなるにも其理由を能尋ぬるに抑も産

靈天神の其精靈たるや纂疏の説に「理氣の混沌中に在る其開闢に及びて天と爲り地と爲り有情となり無情となる」と云中庸に「物の體して遺すべからず」と云へる如く大は天地世界日月星辰に充みち小は人類鳥獸材木草木の末々までに往瀾り生々活潑せしめ給ふて則ち其野菜を生々發育し給ふ神靈を御縣の神と云材木を生々繁茂せしめ給ふ神靈を山口神と云て其神靈は井を堀て水の有らざる所無きが如き道理で各村各地に充みち坐すのヂヤさては産土神とは以上云が如く各鄉村に座て吾人の身體の母の胎内に芽組より一生涯其他五穀野菜悉皆の生長發育を守り給ふ神靈を云てス

支那古代の説がまた全く同説で周禮に云「大宗伯之職掌建邦之天神人鬼地示」と有り此地示と云が土地草木の神靈を云てスまた孝經の疏に社稷の神の「を述て「社土地之主也土地潤不可盡敬故封土爲社」と記し白虎通は「王者所以有社稷何爲天下求福報功也人非土不立非稷不食云云故封土立社稷五穀之長故立稷而祭之也」など見ゆて全く吾國の説と割符を合せて同説で有る抑も田



圃土地は是衣食住の由て出来る所吾生命をつなく根本なるにも其土地の精靈に對ひて禮を致し祭事するは人間に於て至重至大の道たる無論でス  
 是に付て土地の精靈のいかにも不測の徳ある所以を述るに英國の農學博士ソーマ  
 スニーフレナエル氏の説と云に動植物の悉く天地生々の力を吸取て生育するは相  
 違無きが一体土壤は無情の者なるに其生育の草木に於て蘆薈の苦き甘蔗の甘き佛  
 甲草の涼なる芥子の熱なるなどの各々の性得に於ては千里外の異國の者でも此方の  
 を千里外に移しても苦きは苦き甘きは甘き更に變るゝ無く且ツ蘆薈と甘蔗と根と  
 根を拗合せ一ツにして植置ても其苦きは苦き甘きは甘き更に混雜するゝ無くサ  
 ツパリと分るゝ如きは人間の目力にても智力にても知るゝ能はざる者にて實は天  
 地の微妙なる所」と云へり其目力智力の及ばざる所人間外天地精靈の力です  
 また假令へは牽牛子の種などは白是は紅是は縁紅など種を取置き是を若し過ま  
 つて一ツに混交にても爲た時人間の目では誰が誰やら分らぬに其を地に蒔き生い  
 て花が咲に至て一ツも違はず紅の種は紅縁紅の種は縁紅と生わかり各々の花咲て

更に一點の間違が無い此間違の無いのは抑も誰が受持て爲るゝダ亦新曆八九月の  
 比稻の粃が乳液を含んで追々堅まると云時日和の好いと則ち粃の蓋を両方に開き  
 中の實を乾して居る夫が少々曇つて雨模様と見ると忽ちチヤツと其蓋をせき雨に  
 濡ぬ注意をする抑も此注意は誰がせよするのチヤ唯稻が爲ると云てもナト可笑様ダ  
 是が則ち所謂土地精靈の微妙自然の功用にてかく村々所々の動物植物より悉皆に  
 満足の生長を給るのが産土神の神徳と云者で右の譯で氏神産土神と云は吾人の義  
 務上に於ても利害幸福上に於ても必要な者で有ル

以上氏神産土神と云は實に日本人種としていな地球は何くの人は此世の空氣に生息し人  
 間として居る以上本に報ひ始に反るの道を盡さざるべからず其趣旨を國体精華村社  
會粹 練かへしく申したが猶今一言練言をならべ置たきでスソハ例の今や各強國  
 が此東洋に舞臺をひらき各々其技倆を演んとするにも隨て種々な教法が間がな隙  
 がな我日本同胞の心を傾けんと百方手をつくすは目に見ゆる通ソハ悉く害心有  
 でも無るべけれと兎に角日本同胞が無神者とか宗教冷淡とかで打拂ひ其立命方針

に至ては丸で五里霧中と云様の<sup>コ</sup>では濟まい縱此方では夫で立貫く<sup>コ</sup>の思想たるも  
雜居日に添ひ盛なるの到底外人の交際上宗教冷淡で人生の大本立命に於て全く夢  
乎とし其荅辨に苦む如きは文明國と並び馳する今日實に恥べきの事ならずや吁  
同胞諸君や眼を將來利害の如何に放て意を注がれたき<sup>コ</sup>でス

抑も我國には皇祖詔命して吾御魂と<sup>コ</sup>また天位の神靈として神器を賜ひ白雲の向  
伏す限り舟滿つ<sup>コ</sup>け貢奉つ<sup>コ</sup>と遠き國は八十綱打掛て引寄る事の如く千万年の將來  
を誓ひて方向を授け給ひ顯明事は皇孫治め賜ひ幽冥事は大國主神知食せと定め八  
百萬神は天社國社と神祖の詔命として齋祭りませと詔依<sup>コ</sup>國中の公民は天壤の  
共詔命の任仕奉れば死も生きも人も鬼も安着するぞ是日本臣民の立命方針なり  
ける此他を祭るは是其鬼に非ずして之を祭るは謫ふと云者にあるでス

以上我日本には斯の如く正大明確なる一國の精神を備へ一國人民の立命安心の基  
軸を備へて居る<sup>コ</sup>でかく自國に此上なき道を具へながら動もすれば他國の教法に  
迷ふのは實に日本同胞の心底が分らぬでス嘗て米人の演説にも云へり「日本は宗

教なり德行なり美術なり都て文明の事物は固有にて體を備へて見るべき者少から  
ず然るを日本人は其日本人たる特殊の性質を捨て自尊の精神を失なふ如きは余が  
取らざる所開闢來一度も外敵に屈服せられたる<sup>コ</sup>無き無缺の國にして今更外國の  
習慣の爲に屈服せらる<sup>コ</sup>如き不幸は無るべきなり余は竊カニ日本人の爲に憂ふる  
所なり「嗚呼外國人でさへ日本がかく善美の性質を具へながら遂に他國の習慣の  
爲に毀られ獨立帝國なき隨分誇りながら我君とも祖とも有る神明を忘れて仕まふ  
實に相濟ぬ<sup>コ</sup>ヤ無い<sup>コ</sup>かどう<sup>コ</sup>か吾同胞に此道理を膝をま<sup>コ</sup>へ顔見る<sup>コ</sup>度<sup>コ</sup>に能示<sup>コ</sup>と能諭<sup>コ</sup>  
して貰ひたいでス是諸君に向つての頼らの依頼でアル

# 惟神道話 畢



告 廣

年中祭典演義並祝詞全壹册

紙數百二十頁餘 郵稅當方持  
實價金參拾錢五百部引金廿五錢  
此書は始に神祭の人生の最要務なる神祇官。大  
會の四方拜新年祭より曆面の十大祭祈年大祝  
等の宮中御式其由來緣起次に産土例祭古代恒例祭  
十箇の由來臨時祭は遷座祓雨除蝗の類或は戰勝  
入營。開校。各祖神祭。或之地鎮。上禊。船玉。  
出船。旅行。漁獵。冠神。或は開店。造酒。安産  
初宮祭。紐解。結婚。賀壽。病平癒。の如き終て  
六十六題を掲げて其緣起祭神古代行はれし事實を  
擧げて義由を演へ尙終りに一宮總社鎮守神符玉  
串幣帛拍手の類式内社神名帳の起原沿革  
當今の奉務試験の規則類に至る之を掲げて座右の  
便利に供す

惟神道話

全壹册 紙數百貳拾頁餘  
實價金參拾錢 郵稅當方持  
惟神とは彼日輪地球の大なるも手中の玉と愛護さ  
せしる。天神生育の道にて此書○第一演話の趣旨  
○第二五本の指の妙用地球上の享主役苦樂の原因  
○第三併優松本幸四郎の話孟子四端の説の田舎講  
○第四道の本原洋音産靈神の説略

内より生涯の話生死の根本○第五武運の積古豊公  
志津少撤奈勃翁の話大舜の○第六日本は神の愛  
する國支那人西洋人の論程赤城の○第七幽冥古  
代の帝の神助の話唐の斐度の○第八善惡の差引  
計算王祐陰善の返濟を促す市女傳吉が話○第九社  
會大木術さの比論不品行の傳染三頭鳥の譬話○第  
十帝國教法の二源更砂形の教育禪文公蜀山人の學  
問の話○第十一郷村神社町村制の勅語氏神の神徳  
以上を面白をかしく俗話的に滑稽をまじへて記し  
たり其説の新奇妙案讀て知るべし

豫約感告

卅五年九月發行

社會習慣演義 全壹册

紙數百貳拾頁餘 郵稅當方持  
實價金參拾錢 豫約金廿五錢  
此書は年中祭典演義の下巻を斯改題せり則ち人生  
の誕生髮置紐解の類の古式より年中の習慣は門松  
注連繩齒固りの類五節句其他の來歴或は歌詩俳諧  
茶湯生花の或は弓術劍術類の武藝或は相撲歌舞  
妓淨瑠璃或は初午冬籠祭亦是山笠獅子舞俳優遊女  
等の起原沿革の面白き話記應すべし故實悲しむべ  
し樂しむべし者を集め記す者なり

明治三十五年五月廿二日印刷  
明治三十五年五月廿九日出版

正價金參拾錢

著述兼  
發行者

印刷者

發賣所

全

松田敏足  
福岡市土手町七番地

山田純一郎  
福岡市養巴丁四拾貳番地

會通社  
東京市本郷區本郷子目五番地

森岡書店  
福岡市博多中嶋町

明治三十五年五月廿二日印刷  
明治三十五年五月廿九日出版

正價金參拾錢

著述兼  
發行者

松田敏足

福岡市土手町七番地

印刷者

山田純一郎

福岡市養巴丁四拾貳番地

發賣所

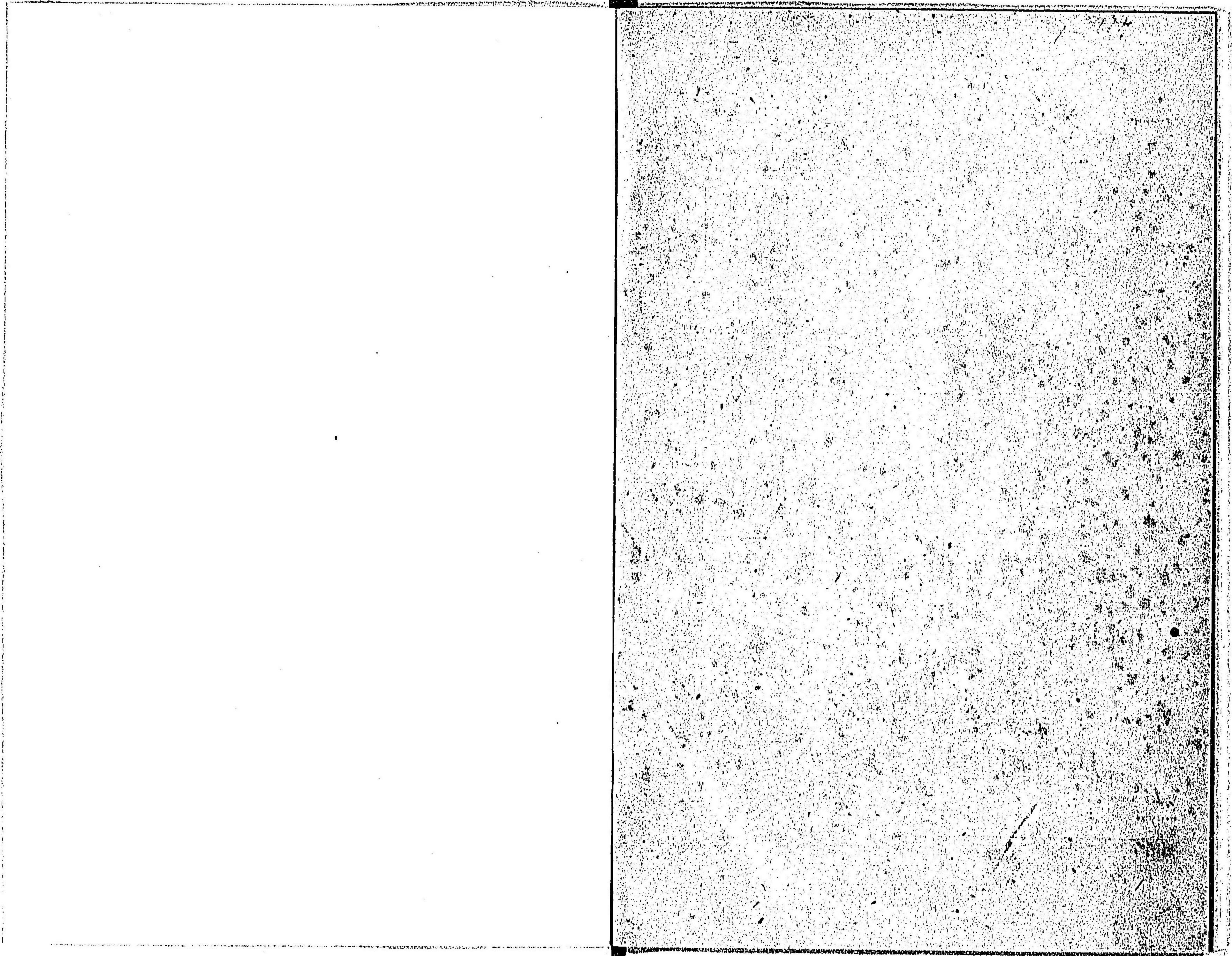
會通社

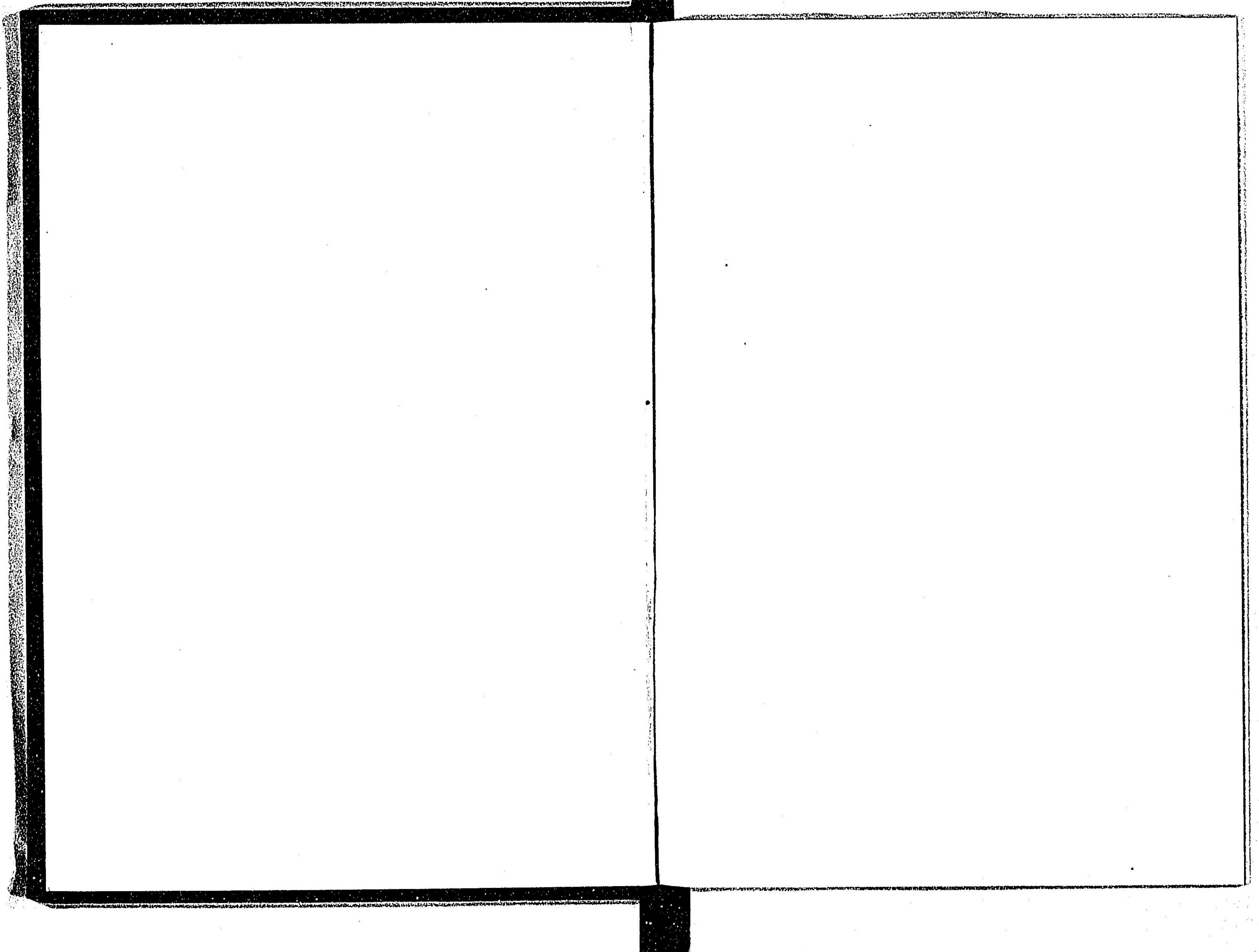
東京市本郷區本郷三丁目廿番地

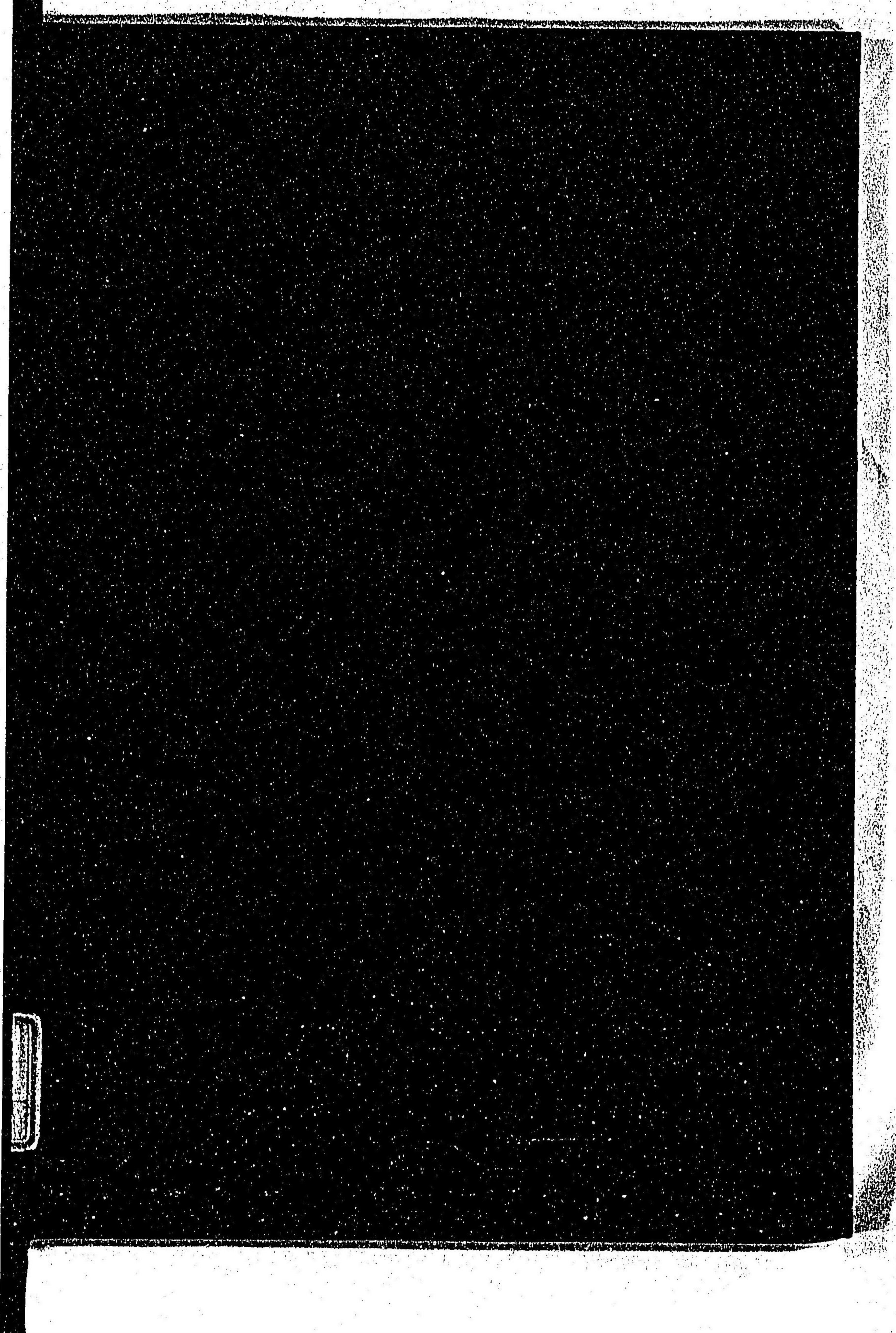
全

森岡書店

福岡市博多中嶋町









92  
196

M

013815-000-8

92-196

惟神道話

松田 敏足(豊田舎)/著

M35

ABB-0024



